

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり



特集 ■ 平成18年度
地域づくり総務大臣表彰

6

2007

3 巻頭エッセー ● 清潔な和歌山県政づくり 仁坂吉伸 (和歌山県知事)

特集 平成18年度 地域づくり総務大臣表彰

4 平成18年度 地域づくり総務大臣表彰
二十七団体の活動と功績をたたえる、新設の個人部門では四人を表彰

6 地域振興部門

●一関市千厩町第13区自治会【岩手県一関市】6 ●NPO法人 大島大好き【宮城県気仙沼市】7
 ●ヤートセ秋田祭実行委員会【秋田市】8 ●NPO法人 古瀬の自然と文化を守る会【茨城県つくばみらい市】9 ●入郷棚田保全協議会【栃木県茂木町】10 ●えいへいじ納涼まつり実行委員会【福井県永平寺町】11 ●大垣市【岐阜県】12 ●引揚を記念する舞鶴・全国友の会【京都府舞鶴市】13 ●日本たまごかけごはんシンポジウム実行委員会【島根県雲南市】14
 ●直島町【香川県】15 ●四国カブトガニを守る会【愛媛県西条市】16 ●NPO 大地といのちの会【長崎県佐世保市】17 ●NPO法人 安心院町グリーンツーリズム研究会【大分県宇佐市】18 ●夕日の里づくり推進会議【宮崎県五ヶ瀬町】19 ●伊江村観光協会【沖縄県伊江村】20

21 国際化部門

●NPO法人 ふじみの国際交流センター【埼玉県ふじみ野市】21 ●七尾を世界へひらく市民の会【石川県七尾市】22 ●磐田市南御厨地区自治会【静岡県磐田市】28 ●みのお外国人医療サポートネット【大阪府箕面市】29 ●八雲国際演劇祭実行委員会【松江市】30
 ●大牟田市【福岡県】31

32 情報化部門

●会津コンピュータサイエンススクール実行委員会【福島県会津若松市】32 ●狭山市【埼玉県】33 ●島田eコミュニティプラットフォーム研究会【静岡県島田市】34 ●周南市【山口県】35 ●高知工科大学学生サークル/CAST【高知県香美市】36 ●八代市【熊本県】37

38 個人部門

●青柳 輝雄【東京都墨田区】38 ●勝野 重美【長野県辰野町】39
 ●大平 展子【静岡県浜松市】40 ●浜田 益嗣【三重県伊勢市】41

レギュラーレポート

首長の思い

27 「高感度コンパクトシティ」の実現に向けて 坂川 優 (福井市長)

地域資源を活かした地域産品づくり (鹿児島県)

42 株式会社 天元 43 有限会社 桜岳陶芸

移住・交流推進

44 67の企業・自治体・有識者が結集！『移住・交流推進準備委員会』が設立へ

全国地域リーダー養成塾 開講式

45 第19期生40人が入塾

46 センター通信



矢越海岸



福島町



青函トンネル記念館



横綱記念館

グラビア

1・23 平成18年度
地域づくり総務大臣表彰

47 都道府県漫遊●茨城県

48 手前みそですが…
●青森県むつ市

三役表彰

●文・沢 ●カメラ・小形又男

千代の山、千代の富士の二横綱を輩出した福島町は、町民との協働による「横綱の里」づくりに取り組んでいる。横綱を描いた街路灯、横綱の土俵入りをデザインした橋の欄干など、各所に大相撲文化が点在し、中心部にある横綱記念館は、九重部屋が夏季合宿に使用するなど、力士と町民の交流の場になっている。また、町が青函トンネルの北海道側に位置するため、青函トンネル記念館を開館し、交流人口の拡大を進める持続可能型観光産業の振興にも努めている。

福島の町立総合体育館で五月十三日、第十七回「女だけの相撲大会」が行われた。海外から参加した三人を含め、計五十五人の女子がトーナメント方式で熱戦を繰り広げ、三十七歳の介護士「田辺山」が百九十センチの米国人「アマゾン・アマンダ」を破り、優勝した。緒戦で敗れたBブロック組でも、ニユージールランド人が準優勝に輝くなど、国際化が目立った女相撲大会だった。

●表紙Ⅱ女だけの相撲大会

(北海道福島町)

ふれあい花壇で行われるコーラス



一関市千厩町第13区自治会【岩手県一関市】 ● 地域振興部門 (p6)



NPO法人 大島大好き【宮城県気仙沼市】

● 地域振興部門 (p7) (上) 菜の花畑 (下) 菜の花種まき

平成18年度 地域づくり 総務大臣表彰



入郷棚田保全協議会【栃木県茂木町】 ● 地域振興部 (p10)

オーナー草刈り(上・9月) オーナー脱穀(下・10月)

ヤートセ秋田祭実行委員会【秋田市】 ● 地域振興部門 (p8) ヤートセ秋田祭



NPO法人 古瀬の自然と文化を守る会
「茨城県つくばみらい市」 ● 地域振興部門 (p9)





校門前で安全指導



大垣市（岐阜県） ● 地域振興部門（p12）

引揚を記念する舞鶴・全国友の会【京都府舞鶴市】 ● 地域振興部門（p13）

復元された平引揚棧橋（舞鶴市）



えいへいじ納涼まつり実行委員会【福井県永平寺町】 ● 地域振興部門（p11）灯ろう流し

たまごかけごはん吟味会



日本たまごかけごはんシンポジウム実行委員会【島根県雲南市】

● 地域振興部門（p14）

直島町（香川県） ● 地域振興部門（p15） 海の駅





和歌山県知事
仁坂吉伸

清潔な和歌山県政づくり

昨年の十二月に和歌山県知事に就任いたしました仁坂吉伸でございます。私が知事に就任するに至りましたそもそのきっかけは、木村良樹前知事が官製談合に関与し、これに関して収賄容疑で逮捕されたからです。従って私に対する県民の期待は、長年経済的發展から取り残されてきた和歌山を元気にするといった根本的な課題をひとまずおくといたしますと、談合、官製談合を防止して清潔な県政を実現せよということであろうかと思えます。

私はもとより、和歌山県の出身でありますし、前知事の不幸事については、大変恥ずかしい思いをいたしました当人ですから、個人の良心としてあのようなことには断じてかわらないぞという自信があります。しかし、県知事としての任務は、そのような個人の良心を超えて、誰が当事者であろうとも、あのような事件は起こり得ないようなシステムを和歌山県の制度にビルトインしておくことであろうと考えました。そこで、選挙中から談合を防止し、「事件の再発を防ぐにはシステムで」というキャッチフレーズを打ち出して、就任後は、このシステムづくりにさっそく取り組みました。

就任の日の記者会見で、①最善の公共調達制度をつくるために、日本で最も見識のある人々からなる公共調達検討委員会を組織し、この検討結果をもとに数カ月以内にあのような事件が二度と起こらないような公共調達制度をつくる。②倫理規定や監察査察制度の導入など知事を含む県庁職員の内部規律の確立を図る——ことを宣言しました。①については、郷原信郎桐蔭横浜大学法科大学院教授をはじめとし、本件について見識のある著名な経済学者、ジャーナリスト、元県警本部長などの方々に委員をお願いし、検

討委員会をすぐ発足させました。

私は、談合を防止することはそんなに難しいことだとは思っていません。全国知事会の提言もほぼこの目的でなされています。しかし、そうして導入された制度は必ず他の面で影響を生じます。その制度は公共工事の質を確保できるようにするでしょうか。知事をはじめ、公の立場にいる人の不当な干渉を防げるようになっていくでしょうか。また、県内の建設事業者の健全な発展に沿うような制度になっているでしょうか。

私は、システムの設計には総合性と現実適用性が最も大事だと思っています。同委員会の発足に際して、私が効率性、公共工事の質、官製談合の廃絶、建設産業の健全な発展という四つの要素を満たすような、ベストミックス制度を提言してくださいとお願したのは、このような事情からです。委員会の熱心な御検討は敬服に値します。熱心すぎて、当初私に心を抱いていた四月実施は無理になりましたが、七月からは新しい和歌山モデルが誕生します。

これと並んで、上記②の県政の透明化のための施策は四月から既に発進しました。とりわけ検察関係者をトップに据えた内部組織としての監察査察制度は、もしこの制度が従来から和歌山県にあったなら、前知事もあのようなことはやろうとしてもできなかったであろうと自負している制度です。

これらに併せて、県退職者の再就職先の公表制度や、交際費の支出を含む知事の毎日の活動のすべてのホームページへの公表なども、既に開始しました。七月一日からは、これら全システムが完成します。

清潔な県政を実現しようと生まれ変わった和歌山県を見てください。

平成18年度 地域づくり 総務大臣表彰

二十七団体の活動と功績をたたえる、 新設の個人部門では四人を表彰

地域の個性豊かな発想を活かし、住民をはじめとしてさまざまな主体が取り組む魅力あふれる地域づくりを積極的に推進して、顕著な功績のあった市区町村、地域づくり団体および個人を表彰する平成18年度地域づくり総務大臣表彰式が三月十四日、東京・千代田区平河町の都道府県会館で行われた。地域づくり総務大臣表彰はこれまで、団体（地方公共団体、NPOなど）を受賞対象にしてきたが、今回は新たに個人部門を創設し、地域づくりで活躍する個人も受賞対象とした。

大野松茂総務副大臣の式辞後、地域振興部門は十五団体、国際化部門は六団体、情報化部門は六団体、個人部門は四人が表彰を受けた。各団体・個人の地域づくり活動を表彰してその功績をたたえ、広く全国に周知することにより、地域づくりのさらなる発展を図るのが狙いだ。

今回の表彰団体は、前回（昨年は三部門計三

十五団体）より八団体少なかったが、新設の個人部門を加えると計三十一団体・個人となる。選定に当たっては、都道府県からの推薦と併せ、地域づくり懇談会構成員からの推薦を対象にした。審査は、他の模範となるような先進性や地域特性を活かした独自性、活動の継続性、規模や内容の発展性、自主性、住民と行政の協働・連携性、住民の満足度や地域経済の活性化などを基準にして選定し、決定した。

地域振興部門

空洞化が進行している中心市街地の再活性化、地域の特産品・観光地などのブランド化、地域の特性を活かしたイベント開催などによる地域経済の振興、外部からの新たな産業導入や地元産業の育成、地域伝統文化の振興、森林保全やごみ減量・リサイクル化、高齢者・障害者に配慮したまちづくり、子供を育てやすいまち



受賞団体・受賞者一覧

地域振興部門 <15団体>

- 一関市千厩町第13区自治会 【岩手県一関市】
- NPO法人 大島大好き 【宮城県気仙沼市】
- ヤートセ秋田祭実行委員会 【秋田市】
- NPO法人 古瀬の自然と文化を守る会 【茨城県つくばみらい市】
- 入郷棚田保全協議会 【栃木県茂木町】
- えいへいじ納涼まつり実行委員会 【福井県永平寺町】
- 大垣市（岐阜県）
- 引揚を記念する舞鶴・全国友の会 【京都府舞鶴市】
- 日本たまごかけごはんシンポジウム実行委員会 【島根県雲南市】
- 直島町（香川県）
- 四国カブトガニを守る会 【愛媛県西条市】
- NPO 大地といのちの会 【長崎県佐世保市】
- NPO法人 安心院町グリーンツーリズム研究会 【大分県宇佐市】
- 夕日の里づくり推進会議 【宮崎県五ヶ瀬町】
- 伊江村観光協会 【沖縄県伊江村】

国際化部門 <6団体>

- NPO法人 ふじみの国際交流センター 【埼玉県ふじみ野市】
- 七尾を世界へひらく市民の会 【石川県七尾市】
- 磐田市南御厨地区自治会 【静岡県磐田市】
- みのお外国人医療サポートネット 【大阪府箕面市】
- 八雲国際演劇祭実行委員会 【松江市】
- 大牟田市（福岡県）

情報化部門 <6団体>

- 会津コンピュータサイエンススクール実行委員会 【福島県会津若松市】
- 狭山市（埼玉県）
- 島田eコミュニティプラットフォーム研究会 【静岡県島田市】
- 周南市（山口県）
- 高知工科大学学生サークル／CAST 【高知県香美市】
- 八代市（熊本県）

●は地域づくり団体等、●は地方公共団体

個人部門 <4人>

- 青柳 輝雄 【東京都墨田区】
- 勝野 重美 【長野県辰野町】
- 大平 展子 【静岡県浜松市】
- 浜田 益嗣 【三重県伊勢市】

国際化部門

海外からの人材招致や政府間合意に基づく交流事業など国際交流の推進、海外からの研修生受け入れなど人づくりに対する協力、海外への専門家の派遣や共同プロジェクトの推進、地域の国際化に対応し得る人材の育成、地域の国際化を推進する地域リーダーの育成、在住外国人支援のための施策への取り組み、外国人観光客の誘致活動や外国企業の誘致活動などに積極的

づくり、秩序ある街並みづくりや美しいまちづくり、行政への住民参加などの分野で顕著な功績のあった団体が選ばれた。

情報化部門

に取り組み顕著な功績のあった団体が選ばれた。

電子申請、同人札システムの導入による行政運営の簡素効率化と業務改革の取り組み、ICT活用による行政手続きのサービス化推進、住民基本台帳カード利用による住民の暮らしやすいまちづくり、ICTを利用した便利なまちづくり、インターネットなどを利用した地域情報化の推進、ICTを活用した地域文化の振興、ICTをコミュニティ活動、地域経済活性化のために活用したまちづくり、ICTを利用した行政と住民との協働・連携によるまちづくり、ICT

個人部門

ITを活用したインターネットサービスなどに積極的に取り組み、功績のあった団体が選ばれた。

個性豊かで活力あふれる地域づくりのため、自ら率先し、さまざまな活動の中心になるなど、地域づくりに貢献している個人が選ばれた。地域づくりに活躍する個人を表彰対象にすることで、功績をたたえとともに、地域づくりのスペシャリストを発掘し、地域づくりのさらなる進展を目指すのが目的。過去に地域づくり総務大臣表彰を受賞した団体で活動している個人も除外しないことにした。

一関市千厩町第13区自治会

「ふれあい花壇」で

地域づくり



副会長

● 藤野真雄

休耕田に

一万本以上の花を咲かせる

私たちの自治会「千厩町第十三区自治会」は、岩手県の最南端に位置する一関市の東部、旧千厩町のほぼ中央に位置し、九十世帯、人口三百六十五人の農村集落である。

自治会では、集落を東西に宮城県気仙沼市と結ぶ国道284号沿いに「ふれあい花壇」を作り、地域住民の触れ合いで協働の和と輪を広め、花壇を訪れる多くの人との語らいなどの交流を何より大切に、そして楽しみに地域づくりを進めている。

地域の花壇づくりの歴史は古く、一九七〇年（昭和四十五年）の岩手国体を契機に盛んになった。地域の交通安全母の会が中心となって始めた沿道花壇づくりは二十五年ほど続



（上）ふれあい花壇全景（平成18年） （下）管理作業風景

いたが、人口減少による会員の減少により母の会での継続が難しくなったことから、九五年（平成七年）に自治会が引き継ぎ、今日に至っている。

花壇は休耕田をキャンパスに、子供から大人まで土と汗にまみれて、一人ひとりの特技を生かした全員参加の労力奉仕で作るあげるのが特徴だ。面積は約八百平方メートル、四十二種類、一万本以上の花を毎年咲かせ続けている。

花壇のテーマは、地元の小学校に新入生が一人もいない年があったことがきっかけで、少子高齢化社会の到来を実感、地域で子育てする気運が大切と考えるようになり、「子ども」をヒントとしている。

二〇〇三年（同十五年）には、地域待望の十人の新入生が入学、子供たちが仲良く手をつないでいる様

子を花で表現しようと考えた花壇が、花いっぱいコンクールの日本一に輝いた。また、翌年には、五人の新入学児童が花壇で元気に歌っている様子をデザインし、全国コンクールで連続入賞した。

静かなにぎわいと

心なごむ「花の駅」を創出へ

花壇作りをする前は、自治会活動は全く低調で、自治会対抗の運動会などへの参加者は極端に少なく、主催者からは十三区はお荷物だと言われ続けてきた。そうした中で、花作りの好きな人たちが立ち上がり、ふれあい花壇を作り始めてからは、地域は大きく変わった。「地域のみんなが協力し合い、自らの地域をつくっていきこう」と気運が次第に高まり、今では、地域のみんなが地域に対する誇りと自信を持って暮らしている。

自治会では、今一つの夢の実現を目指している。それは、花壇近くの国道の難所の改良事業が始まり、そこにパーキングエリアが造られる計画である。そこで、ふれあい花壇を中心に「花の駅」として、静かなにぎわいと心なごむ空間を創出し、地域の活性化に結び付けたいと考えている。

NPO法人大島好き

島全体を資源循環型社会に



理事長 ● 白幡昇一

交流拡大と

自然環境保全が課題

「気仙沼大島」は気仙沼市内でも高齢化率が高く、就職先も少ないために、若年層の流出がこの現象に大きく拍車をかけている。そもそも気仙沼大島は、地域の大きな観光資源であるにもかかわらず、全国的にはあまり知られていない。

現在、この島では自然、海の生業を中心とした体験メニューをつくり、小中高生などを対象とした体験学習の受け入れを積極的に行い、全国から多くの子供たちがこの島を訪れている。島には体験にかかわる施設が少ない。欲しい公的施設はあるのだが、体験にかかわる人たちが自宅を使用するなど、知恵を絞って工夫して、対応している。

自然を活用しながら交流人口の拡大を目指す活動の中で、環境保全というテーマは避けて通れない大きな課題である。地球温暖化防止策をう

たった京都議定書の発効、このちっぽけな島の閉鎖空間の中で、資源を循環させる仕組みがつけられないものか、つくった仕組みを全国に発信し、さらなる交流人口の増大を図れないものか、数人のメンバーで議論が続いた。

たどり着いた結論は、軽油代替燃料であるバイオディーゼルフューエル（BDF）を取り入れた「菜の花プロジェクト」への参画であった。二〇〇五年（平成十七年）四月、島内

にある一軒の食堂に島民を含むさまざまな職種のメンバー十一人が集まり、将来的な目標を踏まえ、今後の取り組みについて激論を交わした。そして、特定非営利活動法人「大島大好き」が設立された。メンバー中には会員の募集に走り回る者、BDF精製プラント購入



環境講座

のめども立っていないにもかかわらず、使用済みてんぷら油の回収、関係行政で法令などを調べる者など、それぞれ活動に活気がみなぎった。

イエローアイランド構想への取り組み

島にはビワ、北限のユズなどを含む黄色の花き類が多く存在する。ならば、この「気仙沼大島」をイエローアイランドにしようという大きな構想が持ち上がった。早速同年六月、島内にある荒れ果てた県道の花壇に黄色のマリーゴールド、ジニアなど約一千本を約二十人のメンバーで植栽した。丸一日にわたるかなりハードな作業であった。市内から回収した使用済み天ぷら油の一部（約四百リットル）を、岩手県藤沢町にある授産施設にBDF精製を依頼、会員数台の車で利用できるかを検証した。また、秋には島内約一ヘクタール

の休耕地を耕作、「気仙沼大島菜の花種まき交流会2005」を企画立案し、イベントとして菜の花の種をまいた。

こうして、短期間の中で精力的に活動を展開した結果、島民をはじめ、多くの市民に会員となって活動に参加していただくことがで

き、今では市内を中心に約百二十人が所属している。同年十二月にはBDF精製プラントを地元金融機関の融資を受け購入し、翌年四月から本格稼働している。プラント購入に当たっては、何らかの補助金導入があれば、経済的にかなりスムーズな運営を図れるのであるが……。

活動を展開して三年目を迎えようとしているが、あらゆる分野において分らないことの連続であった。BDF精製時の副産物グリセリンの処理問題、菜の花の栽培方法などだ。ただ、このことを解決してくれたのが人とのつながりであった。行政を含め、実に多くの人たちから支援をいただいた。

環境の変化は直接、目に見える状況で人間に影響を及ぼすことは少ない。間接的な影響があっても、意識の中で「なんとかしよう」と考える人も少ない。今もって、一般家庭から二酸化炭素（CO₂）排出量が増加しているゆえんである。大人の環境に対する意識啓蒙の策として、小学校への「環境出前講座」も実施し、子供たちを介して多少なりとも意識改革ができればとも考えている。こうしたさまざまな活動を通し、島が黄色の花き類で彩られ、島という閉鎖空間の中で資源循環型社会構築が完遂すれば、気仙沼大島が凛々と輝きを放って島民を優しく包み込んでくれるはずだ。

ヤートセ秋田祭実行委員会

新しい祭りが

市民の交流を拡大



会長 ● 小玉福太郎

秋田の初夏を伝える
イベントに成長

「ヤートセ秋田祭」とは、秋田市の地元の民謡や曲などをアレンジしてグループで踊る祭である。その始まりは、「秋田を元気にしたい」と考えた地域住民が行った秋田大学でのビラまきからだった。

そのビラを見て「何かやりたい」と思っていた学生が、「秋田駅前に多くの人が集まれる祭りを」と、住民とともに一九九八年（平成十年）六月に第一回を開催。昨年は参加者が千五百人を超え、沿道を埋め尽くすほどの観客が集う秋田の初夏を伝えるイベントになり、今年で十回目を迎える。

この祭りには、秋田県内外から老若男女、幅広い年齢層の人が集まる

が、観客と参加者が一体となって会場全体を舞台として踊る「フリース」 というプログラムがあり、これを楽しみにして来る人もいる。また、当日の運営で欠かせないスタッフは、ボランティア団体、大学やタウン誌などを通じて広く募集し、祭り終了後も知り合った者同士で連絡を取り合ったり、参加したチームに入会する人もいる。

祭りを通じて一緒に踊ったり、作業をすることが、普段出会わない世代の人たちの交流のきっかけとなっている。

この祭りを企画する実行委員会のメンバーは、現役の学生や学生のころからかわってきた社会人で構成されている。多くは授業や仕事が終わった後、公民館に集まり、話し合いや作業をするが、開催一カ月前か

らは寝る間も惜しんでの作業となり、公民館は不夜城となる。また、一年を通じ実行委員会所属チーム「酔楽天」だけでなく、参加チームが地元のイベントで踊ったり、公民館などで講習会を自主的に開催し、祭りのPRをしながら仲間の輪を広げている。

祭りが生活の変化と
新たな出会いをもたらす

現在は、開始前から会場の席取りをする観客まで出る祭りに成長したが、この十回を開催するまでの間に、多くの仲間を支えられてきた。まちのイベント広場で公開練習をするチームもある。祭りを

踊り子もボランティアスタッフも観客も
集うフリースダンス

発をしていた地域の人も、今では「この地区で何かあったら私に言ってくる」と応援してくれるようになった。一つの物事を立ち上げた時に、それに目を向けて支えてくれた人たちのおかげで、ここまで続けることができたと言える。

この祭りは私たち実行委員のメンバーを含め、たくさんの方の生活に変化を与え、さまざまなきっかけを与えてくれる。まちやそこに住む人には、まだまだたくさんの可能性があり、これからの可能性やたくさんの方との出会いを大切にして、活動していきたいと思う。

開催するに際しては、卸問屋の社長が取引先に、協賛を集めに自ら進んで頭を下げてくれる。また、飲み屋のママさんが、お客に直接、祭りのPRをして広告のお願いをししてくれる。祭りの当日には、会場内に振り付け講習会を企画してくれる人もいます。

さらに、会場近くで昔から行われていた祭りが、開催時期を合わせてもらえるようになった。開催に猛反

NPO法人古瀬の自然と文化を守る会

都市型農村が展開する

交流活動



事務局長 ● 小菅新一

遊休農地の活用と
農村体験の推進

古瀬の会の活動拠点は、首都圏から四十キロの茨城県南西部にあり、東京・秋葉原からつくば間に開通したつくばエクスプレスの「みらい平」駅が最寄の駅である。会の発足は一九九三年（平成五年）

を続けている。九九年（同十一年）からは、東京・葛飾区「郷土と天文の博物館」の募集した同区民が、年七回ほど古瀬のフィールドに来て、稲作や野菜作り、魚取りなどの農村体験や交流を進めている。

また、二〇〇四年（同十六年）からは東京都立葛飾ろう学校の中学生も参加し、一年間を通して古瀬に来て、農村体験をしている。

古瀬の会は、地元集落の有志が集い、行政に頼らないで遊休農地を活用し、農村文化や自然環境を後世に伝えようと活動してきた。春のヨモギ摘み、たこ揚げ

大八車で刈り取った稲を運ぶ



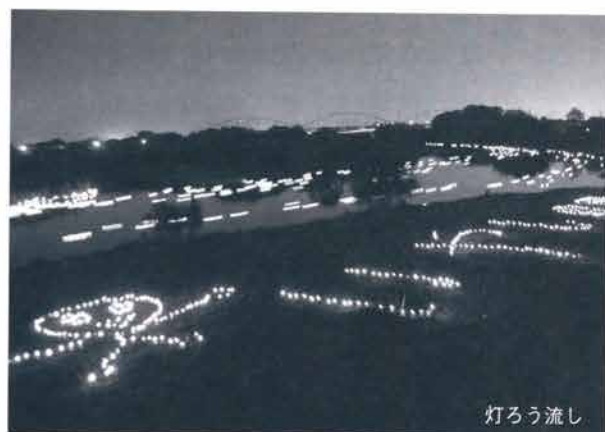
その後、地元の新興住宅地である絹の台自治会との交流が生まれ、夏祭りへの協力や農村体験など

から始まり、田植え、田の草取り、キャンプ、灯ろう流し、稲刈り、魚取りなど、昭和四十年代の農村文化を都市住民と一緒に楽しみながら体験している。〇五年（同十七年）には、つくばエクスプレス開業記念イベントとして車窓から見える場所に、葉の色が黄色や紫色、白色などの稲を使い、絵文字を表す「田んぼアート」を作り、歓迎した。活動資金を捻出するために協力費を呼び掛けたところ、地元の市民をはじめ、会に参加している都市側からも大勢の協力をいただき、大好評だった。

それまでの活動は通年の参加で、なおかつ団体が対象だったが、田んぼアートは不特定の一般市民に呼び掛け、参加者に対しての会の紹介や活動内容を案内するなど、一過性のイベントに終わらず、対応していくことの大変さを痛感した。

農家民宿と青年層会員
取り込みが課題

〇六年（同十八年）度は、市町村合併による新しい「つくばみらい市」の誕生をアピールする趣旨で活動を行った。初めは集落の遊休農地を保全しようと有志が集い、身近なことでできることから活動してきたが、これからは市内全域で自然環境を活



灯ろう流し

用している各団体とのネットワークづくりや、古民家を活用した農家民宿の運営なども視野に入れ、活動していこうと思う。三年前から行っている絹の台自治会での朝市、葛飾での交流市など、地元で生産した野菜などを販売することによって、地元の農家に活気が出ると考えているが、定着するまではもう少し時間が必要なのようだ。

古瀬の会の会員は現在七十四人おり、女性部が五人で、七十歳代の指導者から四十歳代までの年齢層である。年間のイベント回数や参加者が年々増加しており、今後の対応を考えると、青年層をどう取り込むかが大きな課題となっている。

入郷棚田保全協議会

援農ボランティア制度の
導入で棚田を保全

会長 ● 大町弘志

美しい棚田の再生と
保全を目指す

「自然と向き合う勇氣有る者求む！」——茂木町は、東京からおおよそ百キロ離れた栃木県南西部に位置する、中山間地域の自然にあふれた町である。一九九九年（平成十一年）七月、四・九ヘクタール、百八十枚の入郷石畑の棚田が、農林水産省の「日本の棚田百選」に認定された。

入郷地区では、農業従事者の高齢化や農業後継者不足により、年々耕作放棄地が増加していた。

そうした中、翌年八月に、石畑地区を耕作している七人の農家が集い、美しい棚田の再生と保全を目指すそうと「入郷棚田保全協議会」を結成した。

入郷石畑棚田オーナー制度の推移

年度	組	面積 (a)	棚田の 枚数
H14	13	15	3
H15	25	30	6
H16	37	55	14
H17	50	55	14
H18	56	60	20
H19	59	60	20



日本の棚田百選

二〇〇〇年（同十二年）十二月、協議会が主体となり、耕作放棄地をボランティアの力を借りることで解消しようと広く呼び掛けたところ、町内をはじめ、遠方の東京などから七十二人が集まり、耕作放棄地の草刈りを行った。

〇一年（同十三年）からは年三回、ボランティアを募集し、耕作放棄地の復旧と併せて、古代米や酒米の田植え、ハナシヨウブの定植なども実施



(上) オーナー稲刈り(9月) (下) オーナーおだかけ(9月)

し、のどかな田園風景を取り戻すことができた。また、〇二年（同十四年）からは、棚田一アールのオーナー制度を始め、農村住民と都市住民との交流を図りながら、棚田の保全活動を行っている。オーナーは当初十三組だったが、〇七年（同十九年）には五十九組集まり、今年もにぎやかな棚田となりそうな見通しである。

都市住民に自然の良さと
大切さを伝える

オーナーは家族ばかりでなく、会社などのグループでも申し込むことができる。田植えや稲刈り・草刈りはもちろん、日照確保のために立ち木や枝を払うコサ刈りや、泥であぜを作るクロ掛けなど、四月から十一

月まで月一回程度、一連の作業を土・日曜日を使って行う。

棚田での作業は、技術的なことは、地元農家がアドバイスするが、作業はすべてオーナーにやってもらおう。田んぼに足を入れ稲を作る意欲、そして台風などの天災も含め自然と向き合う勇氣さえあれば、誰でも参加することができる。

収穫した米はすべてオーナーで分け合うことにして、がんばって多く収穫できた場合は、多く米をもらえるようにしている。豊かな自然の中で気持ち良い汗をかき、地元農家や自然と触れ合い、おいしい米を都市に持ち帰り、多くの人たちに実際に食べてもらうことにより、大自然の良さ、環境保全の大切さを広く伝えていってほしいと願っている。

えいへいじ納涼まつり実行委員会

観光振興と地域PRに貢献



実行委員会事務局
永平寺町商工観光課課長補佐

● 山田孝明

地域文化と自然を生かした まちづくり

永平寺町は、県都福井市に隣接し、県内最大の九頭竜川が中央を流れている。二〇〇六年（平成十八年）二月、旧松岡町、旧永平寺町、旧上志比村の三町村が合併し、人口約二万人、総面積九十四平方キロの永平寺町が誕生した。

本町には、曹洞宗大本山永平寺や吉峰寺、松岡古墳群など多くの歴史文化資源が集積、また、福井大学医学部、福井県立大学など学術研究機関なども立地している。

当町は、地域文化と自然を活かしたまちづくりを進めている。白山山系を源に日本海へと注ぐ清流九頭竜川は、地域に豊かな恵みをもたらし、アユやサクラマス、アラレガコなど、



灯ろう作り



わがまち魅力発見コンテストの写真

さまざまな魚が生息している。

この広大な川の流れや自然景観が美しい九頭竜川をまちづくりに活かす、町民はもとより県内外から訪れる人の憩いの場として、新たな整備を計画している。また、大本山永平寺を中心とした癒しの空間を活かし、禅体験や食文化など地域特性を活かした総合的な永平寺ブランドの確立を目指している。

『えいへいじ大燈籠ながし』は、テーマ「愛と感謝」の下、町のイメージアップと



えいへいじ大燈籠ながし川施食風景

地域活性化を図るイベントとして十九回継続開催し、現在に至っている。最初は、地元商工会青年部を中心に町民相互の親睦と融和を目的とした「えいへいじ納涼まつり」だった。その後、区長会を中心とした各種団体の協力により、企画、準備、運営などに多くの町民がかかわる「大灯ろう流し」となった。実行委員会は、町内外・全国から供養灯ろう・願い灯ろう（約一万個）の申し込みを受け

付け、商工会、婦人会、老人会の協力による帆書き、組み立て作業を行い、当日ボランティア・運営委員の手により、灯ろうは永平寺河川公園特設会場の祭壇に並べられる。

地元の子供太鼓などミニイベントの後、大本山永平寺の協力の下、川施食（せじき）法要（供養）が行われ、その後、実行委員・参加者の手により灯ろうが流され、川面に幻想的な光の帯がつけられ、その様子は荘厳にて厳粛で、見る人の心を和ませてくれる。

夏の終わりを告げる 風物詩に定着

毎年八月下旬に実施する「えいへいじ大燈籠ながし」は、県内外から年々注目され、灯ろうと夜空を染める花火・光のパレードは、夏の終わりを告げる風物詩に定着してきた。

県外からのツアーバスや、当日宿泊参加者、えちぜん鉄道を利用した参加者も増加しており、このイベントによる観光への貢献度が年々高まっている。

永平寺観光物産ブランドをPRし、永平寺町の知名度アップ、精神文化の聖地・永平寺、自然豊かな清流・九頭竜川を全国に広めるべく、実行委員は頑張っている。

大垣市（岐阜県）

「さわやか3兄弟」事業で
地域の安全安心を推進

生活環境部生活安全課

● 種田昌克

防犯パトロールに続き
見守り活動を展開

大垣市の刑法犯罪発生件数は、一九九三年（平成五年）に二千四百八件だったが、二〇〇二年（同十四年）には五千六百六十六件となり、発生件数が十年間で実に二倍強となった。市（当時の人口は約十五万人）ではこの数字に強い危機感を持ち、まず〇三年（同十五年）五月に「さわやかパトロール」事業を開始した。

パトロール隊員は三百六十五日、午後から深夜まで青色回転灯搭載車で巡回し、小学校や交番と情報交換、下校する子供たちへの街頭指導や駅周辺の巡回を行っている。また、不法投棄や落書きの早期発見に努め、深夜はいかす少年などやホームレスへの声掛けも行っている。



（上）さわやかみまもりEye活動 （下）さわやかパトロール隊員が安全安心情報を受信

次に、〇四年（同十六年）五月に「さわやかみまもりEye」活動のボランティア募集を開始した。「誰でも気軽にできる活動」であることを強調し、参加を呼び掛けた結果、多くの住民の目を自然な形で確保することができた。この活動によって犯罪者には「目撃されるかも知れない」「仕事がいっぱい」と感じさせることができたように思う。

また、うれしい誤算としては、この活動を個人で始めた人が活動中にどんどん仲間をつくり、人から人へとボランティアの輪が広がっていったことである。〇七年（同十九年）三月末現在、三千五十三人が登録している。

携帯電話への情報配信で
三つの事業がそろった

最後に、〇五年（同十七年）十一月からはパソコンや携帯電話へ安全安心情報を配信する「さわやかみまもりネット」の運用を開始した。これまでの情報伝達は、プリント物の配布が電話連絡網が主だった。そこで、それらの情報を一体化し、迅速に伝達する何か良い手段がないか検討したところ、総務省の「地域安心安全情報共有システム」の実証実験に参加することになった。現在、多

くの住民に登録していたが、市や警察から安全・安心情報を配信し続けている。

こうして三つの事業がそろい、「大垣市の安全安心を支えるように」という願いを込め、

「三本の矢の訓え」になぞらえて、「さわやか三兄弟」と命名した。

住民からは、「相乗効果を上げていく」「これまで学校からのプリント物では情報を得るまでに時間的なズレがあったが、リアルタイムで情報を配信されるために助かる」「目的を持って、さわやかみまもりEye活動が行えるようになった」など、非常に好評である。

また、さわやかパトロール隊員は「情報をメール配信されると、現場付近に急行し、重点パトロールを行えるようになった」という。

最近では、道路事情の変化などで都会より地方のほうが安全とは言えなくなってきた。地域を守るためには、行政や警察、そして地域住民との協働が必要となっている。

人々は地域の防犯活動などを通して、「地域がお互いに助け合う社会」の重要性に気付く、ボランティア活動などの大切さに目覚め始めている。今後は、みまもりネットによって、行政や警察が安全安心情報をできるだけ早く提供し、地域が一体となってみまもりEye活動で子供を見守り、さわやかパトロールが学校と地域と行政の橋渡しをしていく協力体制を充実させていきたいと考えている。

引揚を記念する舞鶴・全国友の会

苦難の哀史を後世に継承



事務局長 ● 藤村正巳

平和の象徴
「舞鶴引揚記念館」の開館

舞鶴湾を見下ろす丘陵に「あ、母なる国」の石文、「望郷慰霊之碑」「平和の群像」などが立ち並ぶ引揚記念公園の麓に、舞鶴市並びに全国から浄財を得て、舞鶴引揚記念館が一九八八年（昭和六十二年）四月二十四日に竣工した。この引揚記念館は、全国引揚者の心のよりどころであり、収蔵された数々の資料は、物言わぬ語り部として、静かにかつ力強く平和への呼び掛けをしている。

戦後、五十七万五千人の関東軍將兵・北方領土守備部隊（千島・樺太など）、満蒙开拓義勇軍の少年たち、およびその他の民間人も併せて酷寒の地シベリアに虜囚の身を委ね、凍餓の抑留生活を余儀なくされた。それらの人々は、唯ひたすら内地帰還を夢みながら果たせず、無念の涙を

のんだ七万余の人たちのあったことを今日でも脳裏から離れない。一九四五年（同二十年）十月七日、朝鮮

よりの引揚第

一船雲仙丸入港以来、真岡（サハリン）

から最終引揚

船白山丸入港

までの十三年

の間に、延べ

三百四十六隻

が入港し、六

十六万四千五百三十一人と、一万六

千二百六十九柱の遺骨がこの舞鶴の

地に帰って来た。

昭和の激動の歴史も幕を閉じ、一九八九年一月八日に元号も平成と改められた。引揚記念館は、平成の年号にふさわしく舞鶴市字平の地に開館以来、全国津々浦々から数多くの入館者を迎えている。



「引揚港まいつるを偲ぶ全国の集い」

私たちは、体験した悲惨な戦争の歴史を再び繰り返さないために、同記念館を平和の象徴とし、異国の土に眠る同胞の鎮魂の堂舎として、未来永劫にその保全を図らねばならない。「引揚を記念する舞鶴・全国友の会」を結成して、広く交流を重ね、平和と鎮魂の祈りを捧げるものである。

さらに記念館に依存するだけでなく、舞鶴市および市民と共に、全国

の引き揚げ者および同遺族、これに

賛同する関係者が連帯し、

全国的組織を結成して、平

和への歩みを続けたいと念

願する。

友の会は、以上のような

戦争体験者と
市民の交流推進

トークライブ

- 一 平成元年より毎年、友の会総会を引揚記念館と舞鶴市総合文化会館を会場に、引き揚げ体験者と舞鶴市並びに市民との交流を進めてきた。
 - 二 平引揚棧橋復元・竣工の集い開催（平成六年五月二十七日、募金三千百万円）。
 - 三 「海外引揚五十周年平和式典・引揚港まいつるを偲ぶ全国の集い」開催（同七年十月七日）。
 - 四 「招霊の碑」および「語り部の鐘」を、復元引揚棧橋の前に建立・設置。
 - 四 「語り部の会」を結成。記念館での説明、学校・団体などへの講話開始（同四年八月）。
 - 五 JR東舞鶴駅舎解体により、駅舎の模型を製作し、記念館に展示。
 - 六 「海外引揚六十周年記念平和式典・引揚港まいつるを偲ぶ全国の集い」開催（同十七年十月七日）。
- 現在も、舞鶴市が開催する記念事業や引揚記念館「語り部」養成講座などに協力し、次世代への継承・語り部の育成に努めるとともに、講座修了生によるNPO法人舞鶴・引揚語りの会の活動を支援している。

日本たまごかけごはんシンポジウム実行委員会

小さなアイデアと行動力で

交流を拡大



理事 ● 高岡裕司

シンポジウム開催で
ブーム巻き起こす

島根県雲南市吉田町は、中国山地の山間に位置し、広島県と隣接する小さな町である。江戸時代には、たたら製鉄と呼ばれる和鉄の生産で栄えた。現在は「鉄の歴史村」を標榜し、その貴重な遺産や技法を伝承している町である。

町の産業振興と雇用の場を創出す

るため一九八五年（昭和六十年）、安全な食品づくりをモットーに設立された第三セクター「(株)吉田ふるさと村」が、二〇〇二年（平成十四年）に発売を始めた卵かけごはん専用醤油「おたまはん」は、そのユニークなコンセプトと商品名で、一躍全国的なヒット商品となった。

これに注目した住民から、当市は古くから養鶏が盛んであり、また、全国に自慢できるおいしい米の産地

でもある。この地で「た

まごかけごはん」をテー

マにしたシンポジウムを

開催しようとの声が上が

った。

早速、行政や商工会、

学校など地域の各種団体

で構成される実行委員会

を組織し、「日本たまご

日本たまごかけごはん楽会
設立趣意書

日本全国、北は北海道から南は九州、沖縄まで
小さな子どもからおじいちゃん、おばあちゃんまで
我が国固有のメニューと言いつけるのが

たまごかけごはんです

本楽会は、たまごかけごはんをこよなく愛する者が
たまごかけごはんの芸術上の事項を研究し
これに関する知識の交流をはかることを目的とします

一杯のたまごかけごはんに秘められた

慈母こもものエピソードや思い入れ

家族で囲む食事、米飯食への思い、卵の思い出

又、スローライフ、スローフードの考え方

食育、栄養学、歴史学、民俗学など

様々な見地から思う存分語り、交流し合う事により

日本古来の食の素晴らしさ、家族、ふるさとなど

忘れがちなものへ目を向けるひとときを

持つことをめざして

本楽会を設立するものであります

平成17年10月29日
日本たまごかけごはん楽会

楽会設立趣意書



たまごかけごはん吟味会

で楽しい一時を過
ごした。最後に、
地域住民とともに、
羽釜で炊いた
ごはんを堪能した。
はんを堪能した。

ンポジウムの結果、過疎の小さな町
ではあるが、小さなアイデアと行動
力で、全国に注目される情報発信が
でき、多くの交流人口が生まれ、米
や卵はもちろん、地域の製品の消費
拡大を図ることができた。

また、全国に五十種類以上の卵か
けごはん専用醤油が誕生し、醤油業
界の活性化に寄与するとともに、朝
食に卵かけごはんを食べる人が増え
たと言われるほど、和食の復興にも
貢献した。

「楽会」設立で
会員間の情報を拡大へ

○五年（同十七年）十月に開催し
た第一回目のシンポジウムには、延
べ二千五百人の参加者と多くのマス
コミ関係者が来場し、たまごかけご
はんをテーマに、笑いや涙ありの作
文の発表、学術的な論文の紹介など

今後は、たまごかけごはんをテー
マにさまざまな交流を図っていくこ
とを目的に「日本たまごかけごはん楽
会」を設立し、会員に対し機関誌を
発行するとともに、インターネット
を活用した会員間の情報交換の仕組
みを構築する予定である。こうした
活動をきっかけに、新たな地域づく
りの方法を模索していきたい。

直島町（香川県）

自然と文化と環境を
キーワードにしたまちづくり

観光ボランティア



町長

● 濱田孝夫

官民一体で
循環型社会を目指す

直島町は、大小二十七の島々からなる群島の町である。瀬戸内海の穏やかな気候と白砂青松の美しい自然に恵まれ、古くから瀬戸内海の交通の要衝として栄えてきた。

二十七の島のうち有人島は直島、向島、屏風島の三島のみで、その中心となる直島は、北部が金、銀、銅などの製錬を行っていた三菱マテリアル（株）直島製錬所と関連企業が立地する工業エリア、中央部が近代的な建築美を誇る文教施設群が隣接する

文教・行政エリア、南部が「ベネッセアートサイト直島」「地中美術館」、ふるさと海の家や町営つり公園のある文化・リゾートエリアとなっている。

循環型社会のモデル地域を目指し、住民、事業者、行政が一体となって環境と調和したまちづくりに取り組んでいる。県と共同で策定したエコタウン計画のハード事業では、これまで埋め立て処分されていた廃棄物から有用な資源を回収、有効利用を進めることを目的に、三菱マテリアルが溶融飛灰再資源化施設、有価金属リサイクル施設を建設し、県の豊島廃棄物など中間処理施設とともに、循環型社会の構築に貢献している。施設は一般に公開され、リサイクル現場を見学できる環境教育・学習施設として利用されている。

ソフト事業は、住民主体によるまちづくり、環境学習のフィールドづくりなどを目的として、豊島廃棄物

など中間処理施設の見学をメインとしたエコツアーの誘致、新エネルギーの導入、環境まちづくりグループの養成に取り組みんでいる。また、町内の空き家を借り上げ、スラグ入り粘土を使った陶芸などの体験学習ができる「なおしまスラグ陶芸体験工房」を整備し、直島から環境を学ぶことができる「学習の場」として、また、町民や直島を訪れる観光客が気軽に立ち寄れる「交流の場」として活用されている。

町観光協会設立と
観光客受け入れ体制の整備

従来から豊かな自然や美しい砂浜、釣り場などの貴重な自然資源を有効に活用してきたが、直島本島南部に国際的に有名な安藤忠雄氏の設計による現代美術と出会える「ベネッセハウス・ミュージアム」や、クロード・モネの「睡蓮」を所蔵する地中美術館の開館により大勢の観光客が訪れるようになり、早急な受け入れ体制の整備が求められていた。

このような状況の中、観光客の利便性の向上を図るとともに、町の宣伝と観光施設を充実させることを目的として、二〇〇三年（平成十五年）に「直島町観光協会」を設立した。

協会は、観光客への案内業務や電話などの問い合わせ対応などのほか、豊島廃棄物等中間処理施設の見学をメインとしたエコツアーやベネッセハウス、地中美術館、古い民家

を改修・保存し、現代アートを展示する家プロジェクトの見学をメインとした観光コースを策定し、施設の見学者の予約受け付け、また、観光ボランティアガイドを設置するなど、受け入れ体制の強化を中心に事業を展開した。また、007シリーズの小説「赤い刺青の男」の一部に直島が登場したことを契機に、民間を中心に映画ロケの誘致活動も行っている。

昨年十月には直島の玄関口にふさわしいターミナル施設海の駅「なおしま」が完成し、住民と来島者の交流の場と食事・土産物の提供の場が整備されるとともに、協会がこの施設に入るにより、観光客などの受け入れ体制の充実が図られた。

直島町の地域づくりにおいては、民間事業者が美術館やホテルなどを建設したり、地域に残る古民家を現代美術の展示に活用したりする事業を展開し、町内に異色の芸術・文化が入り込んできたことが端緒となり、行政による地域づくりへの取り組みが始まった。

地域づくりは、行政と住民、民間が協働関係（パートナーシップ）に立って進める必要があることは全国各地で叫ばれているが、本町においてはこれが理想的な形で展開されていると考えている。活き活きとした地域づくりを推進するため、今後もさらに住民や民間との積極的な協働を進めていきたい。

四国カブトガニを守る会

官民一体で

カブトガニを保護



西条市立東予郷土館 副館長

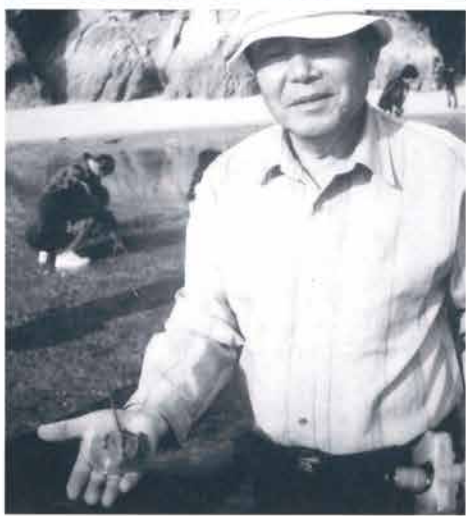
● 今井唯勝

埋め立てや海水汚染で
絶滅の危機に

カブトガニは、二億年以上も前からその姿を変えないまま、現在まで生き続けていることから「生きている化石」と言われている。

わが国では瀬戸内海沿岸から九州北部の沿岸にかけて、数多くのカブトガニが生息していた。西条市東予地域の海岸は、「カブトガニ天国」と言われるほどの一大繁殖地で、一九四九年に県の天然記念物に指定された。しかし、一九六〇年代の高度経済成長に伴う埋立てや海水汚染などの影響によって、その数は激減し、今では絶滅寸前にまでなっている。

カブトガニは、学術的に貴重な生き物であるとともに、血液は大腸菌の内毒素検出など、医学、薬学の分



(上) 年1回、河原津海岸にカブトガニの幼生を放流する
(下) 放流した幼生が9歳に成長して見つかった

野などで人間社会に大きく貢献している。また、カブトガニは、海の環境を示すバロメーターであり、カブトガニがすめる自然環境を守ることが、他の生き物を守り、ひいては私たち人間を守ることにもつながっている。

そこで、「カブトガニと自然環境を守る会」という志を同じくする者

が集まり、一九八九年（平成元年）に「東予市カブトガニを守る会」（二〇〇四年の二市二町合併に伴い「四国カブトガニを守る会」に名称変更）が発足した。当時の会員は約十人だったが、現在は活動の輪も広がりが百三十人ほどに増えている。

市民と行政が協働して
保護活動を展開

西条市では、カブトガニを守る会、行政、学校、市民の皆さんが協働して、カブトガニの保護活動に取り組んでいる。具体的には、カブトガニと自然環境保護の意識啓発やカブトガニフェスティバル、カブトガニ探検隊（干潟の自然観察会）などの開催、および河原津海岸での幼生放流、海岸清掃、家庭や学校での幼生飼育ボランティアも行っている。近年、



四国カブトガニを守る会を中心に河原津海岸の清掃を行う

社会全体の環境保全意識の高まりもあり、市内外からの参加者も増え、成長した放流幼生が数匹見つかるなど、少しずつではあるが活動の成果が現れてきている。

しかしながら、カブトガニは成体（大人）になるまでに十三〜十四年かかり、復活に至るまでは長い道程であり、また、失われた自然環境を取り戻すのも長い時間が必要である。

このたび、「地域づくり総務大臣賞」という大変立派な賞をいただいたことは、非常に光栄であり、今回の受賞を励みとして、今後も地道に活動を継続していきたい。

NPO 大地といのちの会

リサイクル野菜で 元気なまちづくり



代表 ● 吉田俊道

生ごみが「元気野菜」を作る

ごみ減量に始まった生ごみリサイクル。元気野菜作り。多くの仲間と地道に楽しく活動を続けて七年。長崎県や佐世保市との協働により、市民レベルだけでなく保育園、幼稚園、小中学校にまで、二つの奇跡が急速に広がっている。

一つは、生ごみを使うととんでもなく元気で、おいしい野菜ができるという奇跡である。現在、佐世保市内でも四十以上の保育園、幼稚園、小中学校が実践。自分たちが育てたニンジンを送りおろすと、何日たっても色がほとんど変化しない。職員室で先生がニンジンを見比べてびっくり。「同



幼児が生ごみリサイクル

じニンジンだろ？こんなに違うなんてことがあるのか」。その時初めて、ニンジンは栄養成分ではなく、生き物であることを実感したのだ。

生き物である以上、ニンジンによって生命力に差があるのは当然。そして、生ごみで命いっぱいになった土の菌の生命力がニンジンの生命力になること、地球の命の循環を実感した。広く市民が実践できるよう、百貨店の八階に当会の交流室を常設



卒園式の記念品は、自分たちが生ごみから育てた大根を干して作ったたくわん

し、市民からの質問などに毎日対応している。

草ぼうぼうの耕作放棄地なら、生ごみがなくても元気野菜ができる。元気野菜への市民の理解が広がるにつれ、耕作放棄地での元気野菜作りが現在、五島や県北地域で始まった。

子供の心と体を「活性化」

もう一つの奇跡は、命いっぱいのに畑に育つ元気野菜と同様に、子供たちもおなかを元気野菜でいっぱいにしたら、心と体が根底から活性化した。今、三五度台の低体温の生徒はどの学校にも二割程度いる。それが、命をいただく食改善を三十日間実行しただけで、ほとんど三六度台に回復した。

同時に生徒の心と体に驚くべき変化が起きた。「夜ぐっすり眠れる」「朝起きる時の気分がとて素晴らしい」「部活後にぐったりしなくなった。長い時間授業に集中できるようになったのが自分でもよく分かった」「授業がいつもより短く感じるようになった」。ほかにイライラや不安感の改善など、食の重大さを実感した感想文が、当会のホームページ「生ごみリサイクル元気野菜作り」に詳しく掲載されている。

これほど劇的な成果は、現代っ子の食の深刻な実態を物語っている。あまりに奇跡的な事実のため、専門家にもわかに信じがたいようだ。今後成果をしっかりと数値的に把握、公表していきたい。また今年度は、あらゆる親子や職場の昼食時間を使って、市民においしく食べながら元気になる食を勉強する「食育弁当出前教室」を数多く開催していく。

まちづくりは、まず元気いっぱいの体とうずうず感あふれる心を持った市民や子供たちを増やすことからだと実感している。今回の表彰を契機に、行政、学校とさらに連携を深めながら、土を元気にし、食べ物を元気にし、子供たちを地域を元気にし、子供たちを取り組みを急ピッチで広げていきたい。

NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会

「心のせんとくのできる町」
づくり

広報部長 ● 本多雅子

専業農家主導のアグリツーリズム団体は一九九六年（平成八年）、全町民を募って安心院町グリーンツーリズム研究会へと変身した。農業および農村を活性化させ、暮らしを豊かにするには、農家と町民が一体化し、農村の振興を図らなければ駄目だと認識したからである。

宮田会長を先頭に農家、商店主、自由業、公務員など七十人ほどが加入（現在は会員四百人）、会員宅、公民館などで会合を持ち、論議した。その結果、「都市との交流の促進」「心のせんとくのできるまちづくり」「女性の理解と社会的経済的向上」の三点を目標とし、新しい産業としてドイツの先例を学び、農村民泊の実践を目指した。

まず町内イベント、ワイン祭りなどで七戸の会員が試みた農泊は大成。

閉鎖的だった意識が変わり、「なんにも良い所がない」と思っていた安心院の古い物、昔からずっと変わらない農村のありのままの良さを再認識し、普通の田舎暮らしを守ることの大切さに気付いたのである。

会員制農村民泊が
規制緩和で簡易宿所へ

旅館法には規制があり、今まで通りの農家では宿泊の認可が下りなかった。試行錯誤の末、会員制農村民泊とし、「足を引っ張らず、手をつなごう」を合い言葉に、お客との交流を大切にした。二〇〇二年（同十四年）三月二十八日、大分県は旅館業法、食品衛生法の適用規制を全国に先駆けて緩和し、「3・28グリーンツーリズム通知」を出した。簡易宿所として認可したもので、安心院

にとっては忘れられない記念日となったのである。

会員制農村民泊とは、今も続けられ、十回泊まったら親せきとなる仕組みである。その仕組みで親せきになったお客の結婚式に招待されたことは感動であり、忘れがたい思い出となった。

グリーンツーリズムは人が宝

二〇〇〇年（同十二年）十月、大分商業高校三百二十人が学校としては初めて農村体験に来た。入村式では「商業高校なのになぜ農業体験か」と白けていた生徒が、帰りには涙のお別れとなった。

二日間、それぞれの家族と共に農村生活をする中で、人の暖かさを知り、信じることを学び、個を認められて素直になったのである。農村体



「ようこそ安心院へ」教育旅行歓迎式



農村体験、涙の別れ

験学習の教育力の大きさを改めて感じるとともに、農村も子供たちに生きる喜び、力をもらっていると感じづく感謝している。二〇〇八年（同二十年）には、全県下で教育旅行の受け入れを進めることを（財）日本修学旅行協会と合意し、調印した。

また、安心院町を訪れて下さった多くの方にさまざまな知恵、感動、協力をいただき、その交流は未来永劫、宝物になると思う。

今後、農村文化の伝承イベント、生きる力を学び後継者を育てる「大分・安心院グリーンツーリズム実践大学」、さらなる活性化を目指してバカンス法の実現など、安心院町の活動は続く。これまでご指導下さった町内外全国津々浦々の応援団、協働で支えてくださった行政の方々に感謝し、一層のご支援ご鞭撻（べんたつ）をお願いして、受賞の報告をしたい。

夕日の里づくり推進会議

都市住民の

リフレッシュの場を提供

五ヶ瀬町地域振興課
地域振興グループ ● 小迫幸弘阿蘇外輪山に沈む
自慢の夕日を活かす

宮崎県五ヶ瀬町が一九九三年（平成五年）、国のグリーン・ツーリズムモデル整備構想自治体の指定を受け、翌年に町はグリーン・ツーリズム基本構想を策定し、拠点地区（桑野内地区）を「夕日の里」に定めた。そこで、地元では三つの行政区から推薦された若い三十五人の仲間たちとともに、行政と協働しながら夕日の里基本計画の策定に取り掛かった。

まったく何もない、あるのは目の前に横たわる阿蘇、久住、祖母の山並みと、遠くは雲仙の大ロケーション。毎月毎月の話し合い、地区内全戸に呼び掛けての夜なべ討論会など、「地域の良かとこ探し」を続けた。そして、阿蘇外輪山に沈む自慢の

夕日を活かそうと、「夕日の里づくり推進会議」を発足させ、手探りの中、九六年（同八年）から今に至るまで、ソフト事業ばかりで歩いてきた。まず、郷土芸能を中心に開催する「夕陽の里フェスタ in 五ヶ瀬」は、今年で十一回目になり、九州各地から人々が参加する手作りのイベントとして、五ヶ瀬の大きな情報発信の場となっている。

そして、私たちの活動の柱となっているのが、「ふるさと体験交流事業」である。九州のど真ん中で、宮崎県の北の玄関口としての立地条件を活かして、人口と経済力の大きさや情報集積地としての魅力を持つ福岡を



毎年2月上旬、福岡市において「夕日の里ふくおか町人会」総会が開催される。夕日の里からも参加して交流を深める

中心とする北部九州圏域を対象に、交流を働き掛けてきた。都市住民が何を求めているのか、あるいは地元住民がどう対応できるのか、全く手探りの状態で取り組みを始めた。

その交流事業も今ではすっかり定着し、交流で訪れる都市住民は、自然はもちろんのこと、ある人はかまどの飯とおばあちゃんの顔が忘れられず、ある人は五右衛門風呂に感動し、ある人は豆腐づくりが魔法に見えるようだ。手作りのカップボクも木でできた住民票もみんな宝物になり、「五ヶ瀬に来たら元気をいっぱいもらえろ」「五ヶ瀬にふるさとができた」と、人々が涙を流し、別れを惜しんで帰って行く。都市住民が自分を取り戻すリフレッシュの場として参加していることがよく分かる。

自分たちも都市の人々との交流から自分たちが気付かなかった地域の素晴らしさを再発見することができ、また、よそ者と話すことを苦手とし、よそ者を泊めることをためらっていた地元住民も自信を取り戻す良い機会となった。この交流から「夕日の里ふくおか町人会」が結成され、昨年は九軒

の農家による農泊が誕生した。

自然の中で育まれた
文化・人情が地域の宝物に

一度開発の手を入れた自然は、元に戻すのに何百年という時間が必要になる。開発しなかったことが大きな財産になろうとは、世の中、皮肉なものである。そうした自然と人々の営みの中で育まれた文化、そして大切な人情がいかに大きな宝物であるかを学ぶことができたのである。

私たちの日常生活にある水も空気も食物も、大変ぜいたくな生活特権であったし、文化や人間性は農業農村の教育力でもあった。今まで、経済という物差しだけで考えていたものを、もう一方の心の物差しから見た時に考え方は一変する。

厳しい自然も古い習慣も、時には不便さえもみんな宝物に変わってしまふ。そして、都合の良いことに、それらは各々の地域でかなり異なることから、画一的な物が生まれにくいのである。

現在の地域間競争の時代に求められるのは、地域特徴の最大限の利用、つまり差別化である。まさに、地域の自己主張の時代といってもよい。そして、夕日の里の挑戦はこれから続く。

伊江村観光協会

修学旅行生の
民泊受け入れで島が活性化「タロとロマンのフラワー
アイランド」づくり

伊江村は、沖縄本島北部の本部半島北西九キロに位置する一島一村の離島である。島は東西八・四キロの楕円形の形をした面積二十二・七平方キロ、人口は約五千二百人で八つの集落から成っている。四季折々に花が咲き乱れる豊かな自然と、琉球古典舞踊りとは趣きの異なった「伊江村の村踊り」（国の重要無形文化財）などの文化を資源に、村は「タロとロマンのフラワーアイランド」をキャッチフレーズにした地域づくりを進めている。

観光資源に恵まれながらも、日帰り観光が主だったため、地域経済への波及効果が少なかったことから、村は一九八六年（昭和六十一年）に観光協会を設立し、島の観光振興に着手した。従来の「見る観光」から

滞在型観光、特に島の主力である第一次産業（葉タバコ・花き栽培、和牛飼育、漁業）と連携した民泊事業に、二〇〇三年（平成十五年）から力を入れている。

民泊事業を推進するに際しては、住民説明会を開いて受け入れ先の家庭を募るなどの準備に取り組み、同年度に三校の修学旅行生、三百五十



サトウキビ畑の体験作業



三線体験

八人を試験的に迎え入れた。収容先は、島に高校がないため、子供たちは本島にて自活して通学することから、中学校を卒業して空いた子供部屋を修学旅行生の受け入れに利用するとともに、家業の手伝いなどを通して「生のままの島の暮らし」を体験してもらっている。

民泊による消費拡大が
「新たな一億円産業」を創出

また、協会は希望者に対し、伊江村の村踊りの三線体験なども企画し、地域文化の理解を深める機会も設けた。こうした滞在型観光の取り組みを通じて、村では高齢者と子供たちの交流が始まり、高齢者に活力と笑顔が戻るなど、島の活性化が近

年、急速に進んでいる。さらに、地元商店では民宿事業の拡大に伴う食材購入などで売上高が増加、それが農業から漁業までに波及し、島としての滞在型観光の推進が「新たな一億円産業」を生み出そうとしている。

こうした滞在型観光の進展と同時に、協会は高齢者に対する生涯学習の機会創出も行い、地域活性化を図る一方、全国に先駆けた「民泊保険」を企画して地元保険会社と契約を交わすなど、農家と民泊体験生徒の安心・安全を図る取り組みも進めている。島の受け入れ体制の整備により、修学旅行生は〇四年（同十六年）度の十一校、千百九十三人が翌年度に四十一校、四千三十八人に増加、〇六年（同十八年）度には六十六校、一万二千人に急増した。

今後は、村民への体験型観光の広報・啓発活動を通じて、一層の理解・協力を得ながら、受け入れ民泊先の増加と民泊事業の向上を目指し、民泊先（現在八十二会員）を百にまで拡大する予定だ。修学旅行生と島の村民・子供たちとのメール交流が続くなど、リピーター環境も育ってきているため、協会は民泊受け入れ目標を年二万人に掲げ、島の活性化と経済振興を一段と推進していく考えだ。

NPO法人ふじみの国際交流センター

外国人との

共生のまちづくり



理事長

● 石井ナナエ

在日外国人の自立支援の活動

「総務大臣賞おめでとう」――新聞を見た友人から電話やファックスが届いた。ふじみの国際交流センターの活動エリアであるふじみ野市、富士見市、三芳町の行政職員からも「おめでとう、よく頑張ったね」と電話が入った。

在日外国人の自立の支援と国際交流による共生のまちづくりを目標に、活動を始めて十年。無償で活動が続けてきた様子を見て、行政職員が総務大臣賞に応募してくれたらしい。その心配りがうれしくて、「また明日からも頑張ろう」と皆で誓い合った。

私たちが在日外国人にかかわり始めたのが十八年前。公民館で週三回、日本語教室を開いた。当時、外国人は



語学教室の1つ中国語教室の様子

人口の1%にも満たず、移住労働者に国際結婚した外国人女性がチラホラ混じっている程度。世間も外国人に対して冷たく、さまざまな中傷や誤解もあった。そんな時いつも慰め励ましてくれたのが公民館職員

で、「外に研修に行くことが大切」と熱心に勧めてくれたのも職員だった。

多言語情報誌の発行と

日本語指導の強化

日本語教室を続けていくうち、外国人受講生からいろいろな相談を持ちかけられるようになり、二十四時間三百六十五日、日本人と外国人が交流できる場所が必要だと気が付き、一軒家を借りて外国人の自立の支援をする活動を展開していった。

まず多言語情報誌の発行。ごみの出し方から始まって、在日外国人に知ってほしい情報を毎月七カ国語で発信している。「自分の理解できる



多言語情報誌「インフォメーションふじみの」

言語で情報が得られる」とと重宝がられ、必要なページだけ遠方の友達にファクスしている人もいます。しかしA3用紙一ページに載せられる情報には限度があり、各地で多言語情報誌が発行されたいと思っています。

在留資格・仕事や住居・子供の教育や夫婦問題など、五百件超の相談が持ち込まれる。彼らがもはや定住者であり、市民であることが分かる。行政窓口を訪れる外国人も増えたように、当センターの存在価値を高く評価してくれる行政職員が増えた。

また、埼玉県の委託を受けて、配偶者暴力（DV）被害者を保護し、再出発する手伝いをしている。着の身着のまま逃げてきた親子が、次第に明るく生き生きしてくるのがうれしい。

当センターでは、日本語教室や子どもクラブ・取り出し授業支援など、さまざまな形で日本語指導をしている。日本語の読み書きができない外国人は、役所や学校からの手紙も読めず、職業選択の枠も狭い。高校進学でつまずく子供も多く、地域に暮らす外国人の支援はますます大切になると思う。日本語指導の重要性を訴えつつ、地道に活動を続けていきたい。

七尾を世界へひらく市民の会

日本文化資源を活かした
国際交流を実現

事務局長

大星三千代

日本語教室に加え
文化体験プログラムを用意

石川県は、社会教育センターを中心に外国人を積極的に受け入れ、その中核として「金沢を世界へひらく市民の会」が、金沢をより深く理解していただくことを目的に、活発な活動を展開してきた。七尾市でも、社会教育課主催の国際交流セミナーが開講され、講座修了生が中心になり、金沢を世界へひらく市民の会からの確かな助言を受けながら、七尾での日本語教室が始まった。

同じころ、石川県で日本語を学ぶツアーが日本航空やJTBによって企画され、米国、カナダ、オーストラリアからたくさんの方が訪れるようになった。その一部を私たちの七尾で受け入れ、日本語講座と文化

（書道、茶道、華道、陶芸、着物着付けなど）を体験、同時に教科書の中で学ぶ日本語ばかりでなく、目で見て、手で触れられるものは直接体験してもらい授業も取り入れた。

七尾市には和倉温泉があり、入浴体験ができるほか、お祭りもたくさんある。それに参加したり、太鼓も習ったりということ、日本語教師、文化面を受け持ってくれる人、ホームステイ受け入れ家庭先など、みんなで協力して大きな輪の国際交流が始まり、一九八三年（昭和五十

八年）に「七尾を世界へひらく市民の会」が発足した。

最初は、外国語指導助手（ALT）や国際交流員（CIR）中心の日本語教室だったが、徐々に民間からの英会話講師、宣教師、パイロット、交換留学生、技術研修生も引き受けるようになった。また大使館勤務の人は夫妻で赴任する前、二カ月間ホームステイしながら日本語を勉強した。

最近では、日本語能力試験の受験という目標を持って勉強する人が年々増えている。そんな中で、定時制高校受験を目標に頑張ったフィリピン女性が努力の結果、見事一回の受験で合格し、担当した日本語教師はうれしくて、両親と一緒に入学式にも

出席したほどだ。日本語教室は卒業したが、今も頑張って高校生生活が続けており、今年の成人式には振り袖姿で出席し、写真を持って報告に来てくれた。

来訪外国人子供への
日本語支援が課題

この会は発足以来、十六カ国六百人以上の人と出会い、交流してきた。今後の課題としては、最近増えてきた日本人の男性に中国やフィリピンから嫁いで来たお嫁さんへの授業に伴う、子供たちのことが挙げられる。外国から自分の子供を呼び寄せるに当たり、子供たちの生活環境に配慮し、少しでも早く日本の家族、地域に溶け込み、コミュニケーションが取れるように、小中学生に対する日本語支援は行政や学校とも連携し、教室の充実に取り組みたいと思っている。

能登半島地震の時は、元生徒から気遣いのメールや手紙をたくさんいただき、これまでの活動を通してさまざまな国の人たちとの交流から体得できた共通の心の温かさを感じている。今回総務大臣表彰という身に余る評価をいただいたが、これからも無心で出会いを求め、活動を続けていきたいと思います。



（上）日本語教室（下）日本語教室の発表会（劇「浦島太郎」）



四国カブトガニを守る会【愛媛県西条市】 ● 地域振興部門 (p16)
河原津海岸で行っている干潟の自然観察会「カブトガニ探検隊」



大人たちもみんな
で元気な土作り

平成18年度 地域づくり 総務大臣表彰



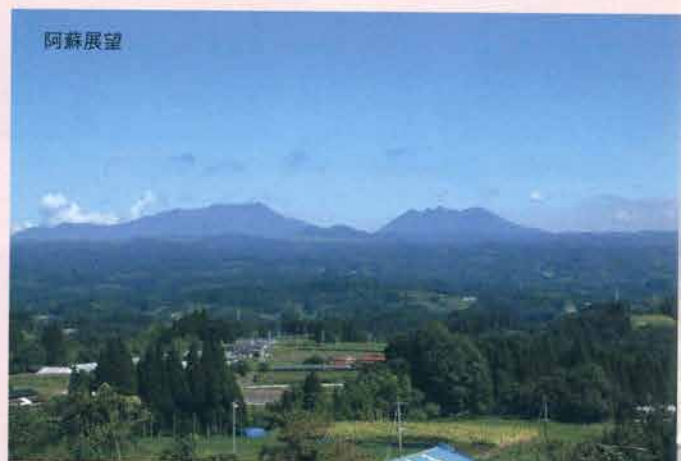
全国藁こづみ大会

NPO法人 安心院町グリーンツーリズム研究会【大分県宇佐市】
● 地域振興部門 (p18)

● NPO 大地といのちの会【長崎県佐世保市】
地域振興部門 (p17)



相浦西小2年の児童と野菜づくり



阿蘇展望



伊江村観光協会【沖縄県伊江村】 ● 地域振興部門 (p20)
修学旅行生の見送り



フェスタタ日

夕日の里づくり推進会議【宮崎県五ヶ瀬町】
● 地域振興部門 (p19)



外国人も参加する体育祭（綱引き）



NPO法人 ふじみの国際交流センター【埼玉県ふじみ野市】

● 国際化部門（p21）小学校に出向いて国際理解講座



みのお外国人医療サポートネット【大阪府箕面市】

● 国際化部門（p29）定例研修会の様子



七尾を世界へひらく市民の会【石川県七尾市】 ● 国際化部門（p22）

ホームステイ家族を交えての交流会



八雲国際演劇祭実行委員会【松江市】 ● 国際化部門（p30）第2回八雲国際演劇祭開会式



大牟田市（福岡県） ● 国際化部門（p31） 中国大同市への環境観測機器贈呈式



磐田市南御厨地区自治会【静岡県磐田市】
● 国際化部門（p28）

コンピュータサマーサイエンスキャンプ講習風景



会津コンピュータサイエンススクール実行委員会【福島県会津若松市】
● 情報化部門（p32）



狭山市（埼玉県） ● 情報化部門（p33）
火災情報や緊急情報の24時間メール配信

周南市（山口県） ● 情報化部門（p35）

平成17年度に離島「大津島」へ敷設した海底ケーブル



島田eコミュニティプラットフォーム研究会
【静岡県島田市】 ● 情報化部門（p34）



地域活動をITで支援する
—eコミュニティ・プラットフォーム実践実験—

島田市 NIED

ようこそ！

eコミュニティしまだは静岡県島田市と独立行政法人防災科学技術研究所が共同で研究する島田市を中心としたコミュニティポータルです。このページは、地域で活動を行っているグループの人々の思いや動きを活動日記ヘッドラインや地図で情報発信したり、電子会議室（フォーラム）で情報交換するためのページです。

あなたもeコミュニティしまだに参加してみませんか？おもしろ島田人に出会えるかも・・・？！

誰でも、各グループの投稿記事に対して、コメントできます。もしもご寄せ下さい、企業の方や商店の方、お友達同士でもeコミュニティしまだに参加できます！！eコミュニティしまだの詳しい説明はこちらです

事務局からのお知らせ

ブログ講習会のお知らせ（2007-4-5）
eコミュニティしまだフォーラムへのご協力ありがとうございました（みのり）（2007-4-3）
新しい仲間が増えました（歩歩健日誌）（2007-3-29）
新しい仲間が増えました！（川越し十一番街）（2007-3-23）
【お知らせ】観測衛星「いち」の衛星写真が見られます！（2007-3-19）

News！最新の投稿記事10件

04/10 19:23 島田第一中学校生の振替は素晴らしい（しまだ環境ひろば 水とみどり分科会）
04/10 14:57 手紙で遊ぶ（島田市東山町地区センター）
04/10 11:44 山岡鉄舟の鉄馬（8）（御守河村家）

静岡県の災害情報

静岡県の災害情報
03/29 09:06 石川県 能登
花巻市ランディア事業（石川県
災害対策本部）



高知工科大学学生サークル／CAST【高知県香美市】

● 情報化部門 (p36) 小学生へのパソコン授業の様子



八代市(熊本県) ● 情報化部門 (p37)

次世代のためにがんばる会・蛸殻による川の浄化活動



青柳 輝雄 氏【東京都墨田区】 ● 個人部門 (p38)

地元消防団などと夜警活動

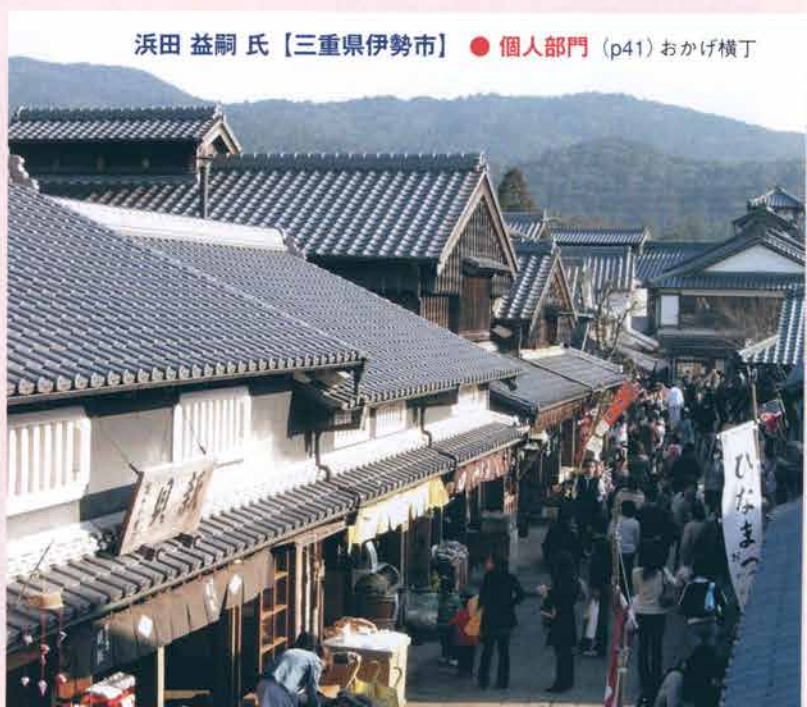
勝野 重美 氏【長野県辰野町】 ● 個人部門 (p39)

町民総踊りで町中がにぎわう「辰野ほたる祭り」



大平 展子 氏【静岡県浜松市】

● 個人部門 (p40) 物産館ぶらっと



浜田 益嗣 氏【三重県伊勢市】 ● 個人部門 (p41) おかげ横丁

福井市は、平成十八年二月一日に美山町、越廼村、清水町との合併により、総面積約五百三十六平方キロ、人口約二十七万人の新しい市として誕生した。

東は美しい山並みを有し、西は雄大な日本海に面しており、清らかな九頭竜川、足羽川、日野川の三大河川を有する自然環境に恵まれたまちである。また、戦国時代の城下町が当時のままの状態で見守られ、保存されている全国的にも貴重な一乗谷朝倉氏遺跡、福井藩主の別邸で国指定の名勝となっている養浩館など、歴史的遺産にも恵まれている。

明治二十二年の市制施行以来、震災、震災、水害など数多くの災害を市民の不屈の気概で乗り越え、「不死鳥のまち」を築き上げてきた。

本市の中心市街地は、福井県の県都として社会経済活動の中心的役割を果たしてきた地域であり、JR福井駅を中心に商業、業務、居住などの多様な都市機能や、公共交通の結節機能が比較的にコンパクトに集積している。しかしながら、近年のモータリゼーションの進展や商業立地の規制緩和などによって、住宅、商業施設、公共公益施設の市街地周辺部

での立地が進み、中心市街地の機能低下を招いている。この現状を踏まえ、福井市は限られた財源の中で、地域の特性を活かしたまちづくり「高感度コンパクトシティ」の実現に向けて取り組んでいる。

「高感度コンパクトシティ」とは、

し、周辺地域でのゆとりある暮らしやすさを求める。その調和とネットワーク化を図ることで、新しい価値が創造できる都市を目指すものである。

さらに、これまで以上にまちづくりに市民との協働、市民参加の機会を創出するため、市民百人を一同に会する「市民百人委員会」や女性の感性を活かすための「女性まちなかウォッチャー」などをはじめ、各世代、各界、各層など多方面にわたる市民の積極的な参加の下、市政全般にわたるご意見をいただき、その実現性や効果を検証し、市政運営に反映させていきたいと考えている。

「高感度コンパクトシティ」の実現に向けて

首長の思い

福井市長

● 坂川 優



福井駅周辺など中心市街地を本市の「顔」として都心の再生を図り、商業機能、文化機能、生活利便機能を高めつつ、人・モノ・情報などを効率的に集積・中継・発信する機能を集約し、その魅力を高めながら、一方では地域の誇りを大切にし、子供たちとお年寄りの安全と安心を確保

地再開発事業、北陸新幹線の「北陸三県との同時期の開業」に向けた国や関係機関への働きかけ、また、中心市街地活性化基本計画の認定に向けた取り組みや都市交通戦略の構築など、「高感度コンパクトシティ」への道筋を切り開くための重要な施策を着実に実行していく必要がある。

本市には、日本一おいしいコシヒカリ発祥の地、世界一の越前ガニ、清楚可憐な越前水仙、国の特別史跡に指定された一乗谷朝倉氏遺跡、日本のさくらの名所百選に選ばれた足羽川・足羽山公園など、食と観光資源があり、また、繊維産業を中心とした「ものづくり文化」の伝統がある。それら地域の特色や魅力を磨き、結び付けることで生まれる新しい価値を大いに活用しながら、中心部での「にぎわい」、郊外部での「安らぎ」が調和するまちづくりを目指し、二十一世紀の主人公である子供や孫たちの世代が、誇りと夢を持って、安心して豊かに暮らせる「元気で暖かさあふれる」ふるさと福井の礎を築いていきたい。

磐田市南御厨地区自治会

外国人との
共生のまちづくり公営住宅居住者の
半数以上が外国人

磐田市は、静岡県西部の天竜川東岸に位置し、サッカー「ジュビロ磐田」のホームタウンである。二〇〇五年（平成十七年）四月に五市町村が合併し、自然があふれ、歴史・文化の息づくまちとして誕生、一方で輸送用機器産業を中心に製造業が多い活気あふれる工業都市でもある。製造業が多いことから、外国人が増加し、〇七年（同十九年）三月末現在、人口十七万六千人のうち、約五・五％、九千六百三十一人が外国人という状況である。

南御厨地区自治会は、十一の単位自治会で構成され、世帯数約千三百、人口約四千四百人のまちであるが、在住外国人は市内トップである。そ



地区長

● 杉田友司

の状況は、外国人比率約二〇％、県営・公団住宅（四百五十世帯）においては、約五二％が外国人となっている。

私たちのまちに外国人が多くなり始めたのは、〇一年ごろからだ



外国人250人が参加した防災訓練

言葉、文化、習慣などの違いから、地元住民の間に戸惑いが起きた。特に、ごみ、騒音、教育、駐車場、生活苦情などの問題が発生し、住民とのトラブルも多発するようになった。こうした背景を踏まえ、地区自治会は〇三年（同十五年）度、外国人との地域共生に向けた基本的な方針を決め、住民の理解を求めて活動をスタートさせた。

顔の見える関係構築と
行政との協働対応

その方針と自らの行動とは、

- ① 外国人との共生は、単位自治会の課題とせず、地区自治会の課題として対応する。外国人は地区内で生活していることから地区とのかわりが生じる。つまり、学校、防災、防犯、文化体育交流、行政要望などは地区自治会の課題である。
- ② 外国人との共生には「教科書」がない。だからと言って行政に依存するのではなく、できることは現場で自ら（自治会）が取り組む。
- ③ 外国人を排除するのではなく、地区住民との協力・共生をどのように構築していくかを軸足とする。つまり、「顔の見える関係」づくりを進める。

外国人との共生の取り組みは、時

間と根気が求められる。地域住民と同じ仲間であるとの考えで、言葉や文化の違いという障壁をできるだけ低くするよう工夫しながら、外国人にも協力を求めてきた。〇四年（同十六年）度には通訳担当の「自治会サポート委員」制度も発足した。

外国人とのコミュニケーションを図るに違い、体育祭や文化祭、防災訓練などには年度を追うごとに多くの外国人が参加するようになり、地元住民との違和感も薄れ、地区内に開設された「多文化交流センター」でも、交流が図られるようになった。また、県や市との話し合いも積極的に行い、問題解決に努力をしてきた。地区自治会が取り組みを開始して五年になるが、現場ではまだまだ問題が山積している。その背景には、外国人の入れ替わりが早いことや、意思伝達が思うようにいかないことなどに原因がある。

今後は、「地域」「行政」「外国人」三者の協働対応をさらに促進させ、特に企業や外国人の雇用先である人材派遣会社との懇談も進めていかなくはない。外国人も地域住民の一員であるという意識をさらに深めながら、地域住民にとっても外国人にとっても住み良いまちになるよう、取り組みを進めて行く決意である。

みのお外国人医療サポートネット

外国人の医療通訳活動を 通じた安心生活づくり



箕面市医師会アドバイザー・会員

● 小澤英二

在住インドネシア人の 死去がきっかけに

日本語の不自由な地域在住の外国人が、病気になるって病院を受診する時に、同行して通訳するのが本会の主たる活動である。現在、英語、中国語、韓国朝鮮語、スペイン語、タイ語、ロシア語を担当するメンバーが所属しており、要請があった時、その言語の担当者が依頼者に同行することになっている。

ほかには、研修会やセミナー、交流会、懇親会などを毎月開催し、会員の輪を広げるとともに、会員の皆さんを積んでいる。ほとんどの言語でネイティブ（その土地）の先生を招いての勉強会も定期的に開き、通訳のスキルアップも図っている。

私は現在、この団体に関する箕面

市医師会の委員をしているが、それ以前から会員でもあった。この団体ができたのは、一九九九年（平成十一年）に箕面に住んでいたインドネシア人研究員トシリさんが、急病で亡くなるといふ出来事が、そもそものきっかけだった。日本の救急医療体制の不備といろいろな不幸な偶然が重なって亡くなられたと考えられるが、トシリさんが日本語が不自由であったことを理由に入院させてもらえなかったことも大きな原因と考えられた。このような不幸な事態を招かないように、医療通訳などのサポートをするとともに、外国人の医療の問題を皆さんに考えてもらいたい、というのがこの団体の目的である。

私は若いころ、医者になるずっと前にフランスで約一年暮らしたこと

があり、外国で病院へ行くようになった場合、どんなに心細くて大変か想像がついた。医師として仕事をしていると、日本人の患者でさえ、日本語で説明してもなかなかその内容を分かってもらえないことがよくある。まして患者が外国人の場合は当然のことだと思う。

これは言葉が分からないからだけでなく、日本人でも外国人でも医学や医療の知識がないために、いくら詳しい説明を聞いても分からないためであろう。また、外国人の場合は文化や習慣が違うため、日常生活上の常識や考え方の違いから、単に言葉を翻訳するだけでは理解できないのだと思う。このため、医療通訳をする場合は、「言葉の通訳」だけでなく、「文化の通訳」が必要だと指摘する人もいます。



代表 堀橋淑子



外国人市民への保健・医療サポートセミナー（2007年）

外国人の患者と病院の間のやりとりを見ていると、医療側の説明の不十分さや、医療体制の不備などが浮き彫りにされてくる。これは外国人患者の問題だけではなく、実はわたしたち日本人による日本の医療そのものの問題だと思われる。

私たちが医学部を卒業し、研修を積みながら一人前の医者になる過程において、診断や治療方法の研さんに重点を置いて、高い医療レベルを目指すことを目標にした技術偏重の

医学教育を受けてきた結果、患者に理解してもらう方法を身に付けるとか、患者の気持ちや人生観に重きを置いて治療方針を立てるとか、患者中心の医療を行うことが後回しにされてきたためではないかと思われる。

このように、外国人の医療の問題を通して日本の医療の問題点を探り、そして解決していく糸口を見つけていることができるのではないかと、と思うようになった。この活動に、ぜひ多くの人に参加していただけたらと思う。

外国人医療を通して 日本の医療問題点を探る

近年、日本では医療に対する不信感が問題にされている。患者と医師の気持ちがあまくかみ合わないこともよく見られる。医療通訳を通して、

八雲国際演劇祭実行委員会

国際演劇祭で

ひとびくり・まちびくり



八雲国際演劇祭芸術監督

● 園山土筆

村民、行政、劇団が

ボランティアで参加

島根県松江市で一九六六年（昭和四十一年）に創立した劇団あしづえは、「演劇を人々の暮らしの中へ浸透させたい」との理念を持って活動していた。九四年、アメリカカ国際演劇祭に宮澤賢治の「セロ弾きのゴーシュ」で参加し、思いがけなくも最高賞などを獲得したが、実はこの時、「生き生きと働く市民ボランティアの姿」を見て、国際演劇祭は「まちづくりになる」と確信した。

九五年（平成七年）、南隣の八雲村に移り、日本初の公設民営劇場「しいの実シアター」に入ってから、当時の村長に「国際演劇祭でまちづくりを」と提案し、村民、八雲村行政、劇団あしづえの三者が連携して、

演劇祭を開催することになった。

国際演劇祭を開催するに当たっては、多文化社会の到来を予測して、国際社会で通用する演劇祭に育てようと、話し合った。この話し合いの中で、村民、行政、劇団は、仕事の進め方や予算の使い方などが違うことに気付いた。つまり、同じ日本人でも、「文化」が違うということだった。

そこで「どうしたら参加する人たちが、気持ちよく活動できるか」ととことん話し合い、これまでの日本式の実行委員会組織ではなく、村民、行政、劇団から参加する人たちが、全員ボランティアスタッフとなつて、「対等の立場で、知恵

と汗を出して働く」組織をつくることにした。そして、三者が心を一つにして活動するために、共通認識を記した「活動の指針」を作成した。

これは、①三者が手をつなぎ②「演劇」の浸透を図るとともに③国際社会で生きていく力を育てながら④デイスカッションを重ね⑤準備のプロセスを大切に、丁寧な振り返りの上に改善を重ねていけば⑥人が育ち地域が育つ——というものだった。この活動の指針は、非常に大切なもので、実際に、二十ほどある委員会の中で、活動の指針について充分デイスカッションした委員会ほど、その後の準備が順調に進み、ボランティアスタッフが気持ちを一つ



さまざまな問題を討論後、一緒に楽しめる食事を提供

にして活動することができた。

多文化理解が

世界トップレベルの演劇祭に

こうして六百人のボランティアスタッフは、カンパ集めに奔走し、ビクターの宿泊はすべてホームステイで対応した。交通の便の悪さはボランティアが送迎し、食事、文化や宗教、アレルギーの問題などを一つ一つクリアしながら提供した。

演劇祭の開催準備は、「多文化理解」の推進なくては、できないことだった。多文化理解を進めることが、「真のホスピタリティ」にもつながっていった。こうした準備の結果、観客にも参加劇団員にも喜ばれ、ボランティア自身の充実感も感動も大きいものだった。それは、世界的な審査員に「八雲は、世界の演劇祭のトップレベル」と言わしめるほどであった。

九九年（同十一年）のプレ大会、二〇〇一年（同十三年）の第一回、〇四年（同十六年）の第二回ともすべて成功裏に終了した。八雲村は、合併して松江市となったが、演劇祭の創造精神と開催意志は継続され、今年十一月に開催する第三回演劇祭もきつと多くの人の心に残るものとなるだろう。

大牟田市（福岡県）

公害克服の経験を
国際協力を通じて活用

企画総務部総合政策課

「炭都」の共通点から中国
大同市と友好都市を締結

大牟田市は福岡県の最南端に位置し、有明海に面した人口十三万二千人の都市である。三池炭鉱とともに発展し、昭和初期には石炭を中心とした化学、金属、電力など各分野にわたるコンビナートが形成され、鉱工業都市としてわが国の近代工業の発展に大きな役割を果たした。

その一方で、大気汚染や水質汚濁などの公害が生じたが、国による公害規制の強化と併せ、企業、行政、市民の努力により公害を克服するとともに、公害防止技術を蓄積してきた。

一九九七年（平成九年）の三池炭鉱閉山後は、新たな産業振興と広域的環境保全を目的として、RDF（ごみ固形燃料）発電事業をはじめとした、環境・リサイクル産業の立

地促進による循環型社会の実現に取り組み、環境にやさしいまちづくりを推進している。

大同市は中国山西省の北部に位置する人口三百万人の都市である。悠久の歴史を持つ都市として世界文化遺産「雲崗石窟」ほか、数多くの歴史的遺跡が残されている。同市は埋蔵量約七百十八億トンと推定される石炭のまちで、石炭を中心とした電力、化学などの工業が立地している。

八一年（昭和五十六年）、同じ炭都という共通点から両市は友好都市を締結した。以来、



中国・大同市での環境問題講演会

文化、教育、スポーツなどさまざまな面で交流を行ってきた。近年、目覚ましい中国の経済発展とともに、年間出炭量一億トンを誇る大同市の経済は急速に発展した。その一方で、大気汚染はじめ環境問題にも直面している。硫黄酸化物、降下ばいじんなどによる大気汚染が、中国政府が指定している全国百十三の環境保護重点都市中ワースト3になるなど、深刻な状況にある。

環境改善に向けた
国際技術交流の推進

大牟田市は公害防止、環境問題を克服してきた経験と実績があること

から、これらの技術을 最大限に生かし、JICA国際協力機構の「草の根技術協力事業」を活用して、毎年環境部職員二、四人を専門家として大同市へ派遣。発電所、化学工場、污水处理場などで実態調査と技術指導、二酸化硫黄（SO₂）、窒素酸化物（NO_x）、粉じんなどの環境測定、延べ約六百人余りの環境行政職員をはじめ、事

業所職員、市民を対象に講演会を開き、公害問題の克服から市民生活のゴミ問題、環境教育の重要性まで多岐にわたって支援協力してきた。

本市はまた、毎年大同市環境行政職員二人を研修員として受け入れ、国、県の環境研究機関、地元企業などで環境全般にわたり研修指導を実施した。帰国した研修員は、大牟田市のように企業との間で公害防止協定書を取交し、規制基準を守らせるような活動、学校に「グリーン学級」、住宅地に「グリーンコミュニティ」を創設するなど、積極的な環境への取り組みも始めている。現在、大同市の大気汚染の環境基準クリア日数が、これまでの年間九十六日間から二百三十九日間へと大きく好転した、との朗報も寄せられている。

中国の急激な経済発展に伴う市民生活の向上により、今後生活に起因する大量の廃棄物などによるさらなる大気、水などの汚染が懸念される。法律規制のみでの問題解決は困難であり、市民と事業者の自主的な取り組みにより、大きな効果が期待できる。本市は大同市との友好都市環境技術交流事業を通じ、多くの職員が国際貢献の一翼を担い、国際的な視野を広げるとともに、両市のさらなる友好発展を期待している。

会津コンピュータサイエンススクール実行委員会

大学の高い技術と人材を
地域振興に活かす

実行委員 ● 谷ヶ城隆

中山間地域の
子供・学校にＩＴ技術

コンピュータサイエンスサマーカー
ヤンプ会津大学二〇〇六事業は、最
新の施設と世界の最先端頭脳を集め
た会津大学を地域再生のランドマー
クに位置付け、市民との距離感・障
壁をなくし、大学の持つ高い技術と
人材を地域振興に活かすためのプロ
ジェクトの一環として企画、十年間
にわたり実施してきた。

特に産学官民が協力して、出会い
の地会津に、次代を担う中高生を全
国から招き集め、恵まれた環境の中
で最新のコンピュータ技術に触れ
る機会と、サマーカーヤンプという交
流と研さんの場を提供することによ
って、友情と高度情報化時代への夢
を育んできた。その結果、受講生の

中から多数の入学者が誕生し、最近
では彼ら自身が運営スタッフやティ
ーチングアシスタント（ＴＡ）とし
てサマーカーヤンプに参加し、子供た
ちを指導するという形にまで進化・
発展している。彼らは地域との垣根
を意識することもなく、今で
は地域の企業にも身近な戦力
として重宝がられるような活
動を起こすグループに成長し
つつある。

次に、このキャンプの成果
を会津全域に拡大することを
目指して、地域内の各町村に
出前講座を実施した。当時は、
生徒に指導できる教員の数が
絶対的に不足している状況で、
各校には最新のパソコン（Ｐ
Ｃ）と通信環境が整備されて
いたが、なんとＰＣ教室は常

時閉鎖され、ほこりをかぶっていた。
聞いてみると、不用意な操作による
ＰＣの故障を危うくして、生徒に使わ
せていないとのことだった。

社会資本整備の立ち遅れている中
山間地域にこそ、情報インフラの整
備と技術の浸透が急務であると考え
ていた私たちにとっては、ＩＴ技術
の進歩から遮断されていた中山間地
域の変革にはまず、新しい技術を抵
抗なく受け入れてくれる子供たちの
教導こそ、地域振興の鍵であると思
われた。実際、出前講座の実施後、
教育関係者のみならず、地域リーダ
ーの意識を大きく変えることにつな
がり、その後情報インフラの整備は
急速に進み、中山間地域の各校はＩ

Ｔ技術を学習に意欲的に活用するよ
うになっている。

中国との交流拡大と
新たな地域産業の創造

さらに、日中国交回復三十周年を
機に、サマーカーヤンプに中国からの
受講生を毎年受け入れ、日中の中高
生レベルからの相互理解を目指した
草の根の交流活動を実施、今後ま
ます拡大基調にある日中間の経済活
動に伴い、地域経済への貢献にも期
待が寄せられている。また、一昨年
から実施の中国の大学生による当大
学を中心とした会津地方への短期の
研修視察旅行の拡大へも波及してお
り、学術的な交流を越えて会津各地
域への今後の展開に期待が持たれて
いる。

このように私ども、会津コンピュ
ーターサイエンスサマースクール実
行委員会は、子供たちにＩＴ技術へ
の興味を喚起し、新たな人材を会津
で育てようとするこのみにとどま
らず、当大学をランドマークとして
会津地域を全国へと発信し、さら
には中国との草の根の連携と交流を深
めるなど、ＩＴ技術と人的ネットワ
ークを駆使し、観光事業を含めた新
たな地域産業の創造・振興へと歩み
を進めている。



スクーリング（フォローアップ）講習風景

狭山市 (埼玉県)

携帯電話を活用した
行政情報サービス総合政策部広報課
広報担当主査

● 武井 理

携帯電話の格差解消と

一日二万ページの閲覧実現

狭山市公式モバイルサイトを開設したのは二〇〇二年(平成十四年)十一月。iモード、EZweb、Yahoo!ケータイ、WILLCOM(AirEDGE PHONE、H)、そして固定電話「Lモード」の全機種で行政情報の閲覧が可能である。

これまで機種によって閲覧できなくても、「仕方のないこと」として片付けられていたのが現実であり、全機種での閲覧は義務化されていない。このことが情報共有端末としての携帯電話の活用に限界を示している。狭山市は、携帯電話を新しい時代の情報発信基盤となり得るものと確信し、行政情報ゆえに機種によるデバイス(格差)を解消し、「見ら

れない人を生まない」サイトの構築を目指した。

利用率を上げる上で、アクセスのしやすさは最初の一步である。二次元コードの一種であるQRコードの読み取りさえ不要とする各キャリア(通信事業者)の公式メニュー掲載は、携帯電話さえあればアクセスを可能とし、災害時に特に有効である。実際に、キャリアを問わず公式メニュー掲載後にアクセスが十倍以上になり、一日に一万ページ以上の閲覧を実現した。



加えて、日常的に利用されるものでなければならぬ。そのために、

①利用者をサイト内で迷子にさせない
②給食の献立、史跡巡りガイドなど楽しめる情報の掲載
③子育て情報、障害者のための福祉ガイド、安心・安全ガイド、駅の時刻表など役立つ情報の掲載
④そして、いつ見ても「生きている情報」を掲載していることで得られる信頼——。これらが相まって、モバイルを利用した理想的な情報化社会を具現化できる。

新たなサービスの創造と

まちづくり

理想実現には、システムエンジニアの理解と協力なしには語れない。



(上) モバイルサイト機能を活用した災害参集システム
(下) 子育て中のママにもモバイルサイトは大人気

決して高価なシステムでもなければ、公式メニュー掲載も職員の人件費以外に費用は発生しない。多額の予算を要求するモデルでは、普及はもとより継続も簡単ではない。

携帯電話が普及した現在、行政が対象を限定せず誰にでも差別なく閲覧を可能とするサイトを提供する意義は大きい。そして日常的な利用が生み出す「使い慣れ」は、災害時に大きな武器となる。緊急情報や火災情報など二十四時間対応のメール配信も、携帯電話が緊急時に有効であることを印象付けている。

この考えは、携帯電話の活用の可能性を大きく広げ、それらを前提にした、新たなサービスを創造する。〇七年(同十九年)四月には、災害発生時に携帯メールとモバイルサイトを使って消防署員(消防団員は五月から登録)の参集可能時間、そして携帯で撮影した画像などで被災状況を把握するシステムの運用を始めた。すべては、狭山市公式モバイルサイトで実現した情報基盤があればこそである。

狭山市が、すべての情報サービスにおいて携帯電話の活用を選択肢にしているように、携帯電話を基軸にしたまちづくりが一般化する日も遠くないと考えている。

島田eコミュニティプラットフォーム研究会

地域に元氣と安全を育む

ウェブサイト



座長 ● 河井孝仁

「コミュニティサイト開設
による地域担い手の発見」

「eコミュニティしまだ」は、さまざまな地域活動を行っているグループを基礎にした運営に特徴がある。三十余りの地域活動グループがインターネット上のブログや地図情報を利用し、活動の記録や思いを表現している。

それぞれのグループは防災や子育て、環境保護、コミュニティ振興など、多様な目的を持っている。そうした思いから生まれた活動記録や考えが、RSS（ウェブサイトの更新情報をまとめて配信する文書フォーマット）という機能やレイヤ型ウェブGIS（地理情報システム）を利用した共有ページで一覧化され、あるいは「管理人のぶろぐ」で関係付け

られ、さらに具体的な現場での交流会によってつながれていく。

二〇〇四年（平成十六年）十二月に開設されたeコミュニティしまだは、当初は関係者を中心にした七つのグループから始まった。しかし、自分たちの活動を知らせたい、地域の連携に加わりたいたいと、参加グループは次々に増えていった。

また、ウェブページへのアクセスも順調に増加し、月間ページビューは四十万件近くにまでなっている。とはいえ、eコミュニティしまだの意義はそうしたところだけにはない。

参加する多様なグループの中から、地域の担い手が着実に生まれようとしている。今までは「見えていなかった」担い手が、実は何人もいたことが明らかになり、彼らの活動が、インターネットや交流事業の中

で明らかになっている。eコミュニティしまだの最大の成果はそこにあると考えている。

「防犯・防災の活用から
交流の場としての機能も」

eコミュニティしまだを活用することで、多くの活動が地域で生まれている。例えば、島田市大津地区では町内安全点検地図が作られた。災害時に危険な場所を地域の人々が顔を突き合わせながら確認し、eコミュニティしまだのウェブGISに掲載している。防災については、新潟県長岡市との連携もeコミュニティしまだを仲介に始まっている。また、伊太地区では小学生が携帯電話のGPS機能やカメラ機能も利用して、地域発見の記事と地図を作った。（株）まちづくり島田で取り組んでいる



交流会の様子

る「愛するあなたへの悪口コンテスト」は、その裏舞台がeコミュニティしまだで紹介され、多くの「悪口」応募につながっている。

このように、eコミュニティしまだは、人を発見する道具、人が育つための道具、人と人がつながるための道具である。担い手が見いだされ、育ち、人々の連携が地域内で、さらに地域外とも生まれることで、人々の暮らしに、元氣と安全が備わると考える。

一人ひとりが孤立せず、思いを共にするグループとして活動し、その活動が「見える化」されることで、いつのまにか地域に元氣と安全が育まれる。そんな地域づくりに、島田eコミュニティ・プラットフォーム研究会は、引き続き貢献していきたいと考えている。



eコミュニティしまだを利用した防災訓練

周南市（山口県）

CATV網の全域整備
による地域連携の強化総合政策部企画課
中核都市・地域政策担当主査

菅田浩司

周南市は、山口県の東南部に位置し、北は中国山地を背にして、南は瀬戸内海を望み、二〇〇三年（平成十五年）四月に、県内の先陣を切って二市二町の合併により誕生した人口十五万五千人のまちである。

瀬戸内海に面した臨海部には、県内最大の工業製品出荷額を誇る石油化学コンビナートが広がり、山間部には本州唯一のナベヅルの渡来地など、豊かな自然環境が保たれているほか、瀬戸内海に浮かぶ大津島には昨年、全国公開された映画「出口のない海」の題材にもなった太平洋戦争時代の特攻兵器「人間魚雷」「回天」の歴史が残っている。

合併に伴う情報格差の
解消を優先課題に

合併後のまちづくりに当たり、行

財政運営の効率化、行財政基盤の強化、地域資源の多様化など、合併効果が期待される一方で、離島から山間部まで広がった六百五十六平方キロの市域の中で、中心部と周辺部の地域間格差の是正や旧市町間における一体感の醸成など、新たな課題を抱えることとなった。

そこで、これらの課題の解決策の一つとして、新市建設計画の二十一のリーディングプロジェクトの一つに掲げ、優先的に取り組んだのが、情報の地域間格差解消のためにCATVを活用した情報基盤の整備である。

この情報格差問題については、山間部や離島など事業者にとって不採



市内全域で視聴可能なCATVによる市政情報番組

算となる地域の大半が、ブロードバンドサービスが提供されていない状況であり、合併協議会の中でも協議されていた課題であった上、未整備地域からは、自治会などを通じ早期の整備を求める声が強かった。

事業実施に当たっては、CATV事業者二社との連携により整備を進め、合併時のCATV通信網の人口カバー率八四％が、翌〇四年（同十六年）度末には、九八％となった。そして〇五年（同十七年）度には、最大の難所である離島へも海底ケーブル敷設により完了し、合併後から平成十八年度までの四年間で、全域の整備が完了した。

これにより、CATVを通じ市政情報、市議会中継などの視聴が可能となり、市民との情報共有が進展す



平成17年度に離島「大津島」へ敷設した海底ケーブル

るとともに、市の施設を結ぶインターネットとしても活用している。この結果、出先施設も含めて職員の情報共有、情報伝達のスピードアップに役立ち、双方向性の高速情報通信サービスの利用や地上デジタル放送への対応も可能となった。

中山間地の安心・安全な
暮らし実現への活用を

総事業費約十億円の本事業は、厳しい財政状況の中、国庫補助や合併特例債を有効に活用しながら実施したものであり、合併による効果や成果であると言える。

しかし、この事業はあくまで、地域間格差の是正や一体感の醸成を図る取り組みの第一歩であり、急速に進展する情報化社会への対応や高齢化・人口減少が進む中山間地域における、安心・安全な暮らしの実現に向けた効果的な活用など、本市の地域特性に応じた利用により、本来の事業成果が得られるものである。

今後、市民や事業者、関係機関とともに知恵を絞り、連携しながら各家庭への普及拡大や魅力的な活用を進め、本市の将来の都市像「私たちが輝く 元気発進都市 周南」の実現に向けて、前進していけるよう取り組みを進めていきたいと考える。

高知工科大学学生サークル／CAST

大学と地域をつなぐ
インターネット教育活動

中古パソコンを修理して

中山間の小学校などに配備

高知工科大学の学生サークルCAST（Communication Activities Supporting Team）の活動目的は、インターネットコミュニケーションによる地域の情報化促進である。現在、主に高知県内の小学校におけるパソコン教室のサポートや、小学生に対するホームページ、はがき、学級新聞の作成指導などを行っている。このような活動に対する先生方からの感謝の声もうれしいが、それ以上に子供たちの笑顔が何より励みになっている。

CAST設立のきっかけは、一九九八年（平成十年）に始まったドリームネットデーという活動だった。ドリームネットデーというのは、当



代表 ● 岡村 大

時IT普及率の低かった県内の小学校に行った普及活動のことである。

これは、米国のネットデー（企業や地域の人たちが協力してLAN工事を行い、自分たちの地域にIT普及を行う活動）を参考に、NTTなどの企業や県が中心となり九八年に開始したサポート事業だ。そのドリームネットデーの活動を学生主体で行おうということで、九九年（同十一年）に学生サークルCASTが結成された。顧問は、企業や県と関係の深い、現フロンティア工学コース長の清水明宏教授にお願いした。

当時の活動内容だが、まず企業や県からいただいた中古パソコンを修



理・調整し、主に希望する中山間の小学校に配備した。次に、配布した小学校で子供たちが教室でいつでもインターネットを扱えるように、企業や県、地域ボランティアと協力して、各教室までLAN配線を行った。さらに、簡単に楽しいイベント活動を行うことで、子供たちに「学ぶ」「遊ぶ」感覚でパソコンに触れてもらった。例えば、パソコンを配備した学校間で絵や文字によるメール交換をしたり、ウェブカメラを使った交流を行ったり、CASTが作成した絵描きソフトを使ってのコンテストなどを行った。



LAN配線工事の様子とパソコンの設定作業（右上）

子供たちは初めて体験することに興味津々で、パソコンが自分の思い通りに動く満面の笑みを見せてくれた。LAN配線の工事に参加した父兄や地域住民も、工事が終わった時には子供たちのためにやり遂げたというすがすがしい顔をしていた。

子供たちが安心して
ネット活用できる活動を計画

この九年間にわたる活動によって、県内の小学百六十二校に千三百九十五台のパソコンを配備し、高知県の小学校パソコン普及率およびインターネット接続率を大幅に向上させることができた。またCASTの部員も、企業や県、地域住民とともにボランティア活動を行うことで、さまざまな貴重な経験を積み、成長することができた。

今後は、これまでと同様に、小学校へのパソコン関連授業のサポートを行いながら、ドリームネットデーで行ったさまざまなイベント活動を発展させた企画を実施していきたいと考えている。併せてエチケット（インターネット上のエチケット）などの教育を行い、子供たちが安心してインターネットを活用することができるよう、さまざまな活動計画を立てている。

八代市（熊本県）

地域SNSによる
住民自治のまちづくり

合併に伴う

地域情報格差を是正へ

八代市で運営している地域SNS「ごろっとやっちょろ」が、「平成十八年度 地域づくり総務大臣表彰・情報化部門」を受賞した。「ごろっとやっちょろ」は、ICTを利用した地域活性化の手段として、本市で二〇〇三年（平成十五年）度から運用を開始したものであり、住民同士の交流基盤として、また、広報基盤として役立っている地域SNSの草分けとなった。

現在、国の施策をはじめとし、「ごろっとやっちょろ」をモデルとした地域SNSが、住民参画や地域活性化のためのツールとして、広がりを見せていることは、本市としてうれしくもあり、同時に大変に誇りに

感じている。



市長

坂田孝志

八代市は、〇五年（同十七年）八月に一市二町三村が合併して誕生した自治体で、人口が約十四万人だが、面積は約六百八十平方キロを有して



まちづくりコミュニティによる勉強会

いる。このような広大な地域においては、情報通信格差が発生しやすく、この格差を是正するために、本市では地域インターネット事業、CATV事業、移動用通信鉄塔整備事業などを進め、格差をなくす努力を行っている。

また、新市建設計画において「住民自治によるまちづくりの推進」を掲げ、地域と行政がパートナーとして協働・協調していく「創生」輝く新都八代」を目指し、そのための基盤の一つとして「ごろっとやっちょろ」の企画・運営を進めてきた。

コミュニティの自発的発生と
活動の幅の広がり

「ごろっとやっちょろ」は、SNSにより構築された人間関係ネットワーク上で、日記や掲示板などを介し、情報交換を行ったり、活動コミュニティを形成することができるようになっている。さらにこれらの活動が、インターネット内で終始するのではなく、実際に地域での顔合わせができるような運営も併せて行っている。

本市では、このようなサービスを提供することにより、かつて近所付き合いや寄り合いなどで成立していた人と人とのつながりを、現在の社

会に馴染んだ形で再現することにより、現在失われつつある地縁の力を取り戻そうとする試みを行っている。

その結果、「ごろっとやっちょろ」を中心とした子育てや環境問題、まちづくりなどのさまざまなコミュニティが自発的に生まれるとともに、それぞれのコミュニティの活動の幅もますます広がりをみせており、このことは、本市が目指す「住民自治によるまちづくり」に向けて、着実に前進していることの証しではないかと考えている。「ごろっとやっちょろ」の企画・運営の目的は、ITという名前で表現される情報技術を利用し、地域内で住民同士がコミュニケーションを行い、より良い地域社会を実現していくものであり、まさにICTの「C」の部分を実現化したものである。

このようなICTを利用した地域メディアを既存のメディアと融合しながら、地域に根付かせ、地域に住む誰もが気軽に、安心して人間関係を構築することができる基盤を維持していくことが、行政の地域運営に課せられた使命であると考え、今後「ごろっとやっちょろ」を中心としたICT事業の企画・運営を推進していきたいと考えている。

青柳輝雄氏【東京都墨田区】



地域の安全を

拍子木で守る

運動不足の解消に

夜警活動を開始

私は一九三五年（昭和十年）、秋田県院内町（現湯沢市）に生まれた。緑豊かな町で、明治時代には銀山があり、明治天皇が見学に来た。隣村には秋の宮温泉があり、横綱照国と菅総務大臣の故郷でもある。左隣りは旧小野村で、世界三代美人の一人小野小町の出生地でもある。三十数年前に町村合併があり、現在は湯沢市となっている。

私は五一年（昭和二十六年）、中学を卒業して十五歳で東京の酒店に就職。一人夜行列車に乗り、つづら一つの荷物で、あこがれの東京に出て来た。友と恩師の寄せ書きをお守り代わりに、これまで頑張ってきた。手に職をつければ、飯の食いはぐれはないと言われた時代であった。そこで五六年（同三十一年）、ハン

ドバック職人になろうとして、親方に弟子入りし、五年間修行して仕事を学んだ。修行も終わり、六一年（同三十六年）に独立、同時期に同郷の妻と結婚し、六四年（同三十九年）に墨田区に転居した。二人の子供に恵まれ、仕事は朝八時から夜十時まで、一日中座る仕事のために運動不足となった。

最初は、町内を散歩したが、不審人物と誤解されてはと思い、郷里で子供のころ、夏休みと冬休みに子供会で行った火の用心を思い出し、町会長に相談して拍子木を借り、夜警活動に入った。そのころから、私のボランティアが始まった。

PTA、消防団、町内会のほか、最近では夫婦で、または老夫婦がウォーキングするのを見掛けるが、三十五年前は一人も見掛けなかった。

墨田区押上三丁目京島地区は、古い木造家屋の長屋が多い所であ



拍子木を打ちながらの夜警ボランティア

る。一度火が出れば、回りの速い地域である。毎夜十時から十一時半まで、約九キロを回り、その間、無灯火の自転車には「夜はライトを付けましょう」、公園では中学生の夜遊びに「気を付けて帰るように」などと呼びかけている。

その日あった事を娘に話をするころがあるが、娘からは「変なことを言っている刺さった大変」と言われるが、地域ではいろんな役職をやっているの、見過ごすことができないでいる。

地域住民の励ましが支えに

火の用心の夜警活動でこれまで、二度休んだことがある。二十二年前の八五年（同六十年）、妻を亡くし

た時である。お盆で一人里帰りした時、駅のホームで倒れ、二日後に死去した。妻とは一緒に夜回りした思い出があり、しばらくは拍子木を持つことができずにいた。

その時、近所の老夫婦から「元氣を出して回ってね」「拍子木の音を聞かないと家で寝れないよ」「あの音を聞くと安心できる」などと励まされた。地域の皆さんからパワーをもらったその時から、妻の写真を財布に入れ、お守りにして毎日回っている。

二度目は二年前に胃がんの告知を受け、胃の三分の二を切除した。三週間退院、回復した後、火の用心の活動を復活したが、改めて命の大切さをつくづくと考えた。親からもらった命、五体満足に感謝して、地域の皆さんからパワーをもらい、毎晩手を振ってくれるおじいちゃん、おばあちゃん、それに子供に感謝しながら、こんなに長くできるつもりがなかったのが、もう三十五年になった。

マラソン選手有森さんがメダルを手にした時、「自分を褒めてやりたい」と言ったが、私は「自分を褒めてやりたい」と言える日まで、まだまだ頑張ってみよう。

勝野 重美 氏【長野県辰野町】



ホタルの町を復活

戦後の経済復興で 絶滅の危機に

長野県辰野町は、古くから自然に恵まれたホタルの名所であった。一九二六年（大正十五年）、県の天然記念物に指定された日本でも古いホタル発生地である。それが戦後の経

済復興と裏腹に絶滅の危機に直面した。それを救ったのはホタルの町を自負する地域住民であった。

水質汚染対策には沢の清水を入れた。休耕田を利用してホタル専用の水路を造った。水路改修にはカラマツの間伐材を使った。水路のコンクリート化には水路幅を狭めることなく、底には石灰岩の碎石を敷いて対応した。しかし、その一方で水温の低下、木材の腐朽、道路の拡張阻害や泥の堆積など、常に犠牲を伴う事業であった。それらを克服できたのはホタルに対する、町政や地域住民、さらには町全体の支えがあったからだと思われる。

ホタルは、誰にもよく分かる環境指標生物である。中でもゲンジボタルは本州、四国、九州のみに生息する日本固有の昆虫である。また、水の中で育つ幼虫はホタル科の中でヘイケボタルとともに珍しい。川辺に群生して名所をつくるゲンジボタル、水田に広く分布するヘイケボタル



公園の大切なエリアホタル水路



小学生から大人まで見学に来るホタル学習

ルは昔から身近な昆虫として親しまれてきた。虫を愛でるのは古くより伝わる民族の文化でもある。

町は、八九年（平成元年）からほたる童謡公園の建設を始め、水路部分の完成までに十二年かかった。工事は土木工学的には終了したが、生物学的には出発点である。古い施設も活かしての公園だが、全体が機能するには時間がかかる。一シーズン三十万のホタルの乱舞を目指して努力が続けられている。

町の特別シンボル認定と ほたる祭りの開催

ホタル発生の量はかわる人の汗

の量だと、私は言い続けてきた。今は大きな公園になり、今後の成否は町民の努力に委ねられている。生き物を守るには不断の努力が求められる。自然は寛容だが、容赦しないという先人の言葉がある。穏やかな流れも一瞬にして濁流に変わる。美しい自然を守るということは、技術だけでなく、それを超えるものがある。美しい花を育てる知人に「どう育てるか」と問うと、「花は愛」と笑顔で応えてくれた。

町では今年、第五十九回「辰野ほたる祭り」が開かれる。近在はもとより、県内外を問わず、時には国外から訪れる客もある。成虫の季節でなくても、公園を訪れる客は少なくない。あるグループの客は、この公園の水路は巻貝カワニナの牧場だと言った。エサとなるカワニナの育つ水路造りがなにより大切である。そのためには、草刈りも泥揚げも時宜を得た管理が求められる。

辰野町は町花・町木の制定の折りに、ゲンジボタルを特別シンボルに定めた。町民憲章には「ひととまちも自然も輝く 光と緑とほたるの町」と定めている。さらにホタル保護条例も定め、手厚い保護が加えられている。これもホタルに対する町民の思いの深さと感謝している。

大平 展子 氏【静岡県浜松市】



NPOで村おこしに挑戦

林業不振と過疎・高齢化の
地域を活性化

「夢未来くんま」は二〇〇〇年（平成十二年）六月、県下で五十四

番目にNPO法人に認証された。継続性と信頼のある組織づくりを目指し、それまでの活性化推進協議会を改め、NPO法人として再スタートした。浜松市熊地区（地元の人々は「熊」と呼ばず、愛称で「くんま」と言う）は江戸時代、秋葉街道の宿場町であった。また、天竜美林を形成する典型的な林業地帯であるが、林業の不振と過疎・高齢化の三重苦に悩む地域になっていた。

この現状を何とかしようと一九八五年（昭和六十年）、公民館で「明日の熊を語る会」が開催された。その席で、都市と山村の交流を実現するため、熊の食文化であるそば味噌を商品化し、販売す



水車小屋

る夢を女性の代表者が語った。その発言が大反響を呼び、事業化したのが翌年春だった。昔のようになぎやかさを求め、再び地域を活性化しようという機運が盛り上がった。

国、県、市の補助金の受け皿として、熊地区活性化推進協議会（地区全三百六十戸が加入）が設立された。地元負担金は財産区の木材（昭和の初期に購入した山林を）を売却しての大仕事であった。

八八年（同六十二年）五月、くんま水車の里（農産物加工）と「かあさんの店」（直売・食堂）がオープンした。本物志向が叫ばれ始めたころだった。「母さんたちの村おこし」

で話題性もあり、テレビや新聞、雑誌でも取り上げられ、当初より大勢のお客様に恵まれた。協議会は、八九年（平成元年）度に「村づくり」部門で天皇杯と農林水産大臣賞を受賞した。

商売は順調だった。しかし、「いざ」の時のために貯めていた資金がみ

なし法人税の対象となり、多額の税が課せられた。また、やや当初の勢いに陰りが見え、事業の見直しや組織改革のために法人化の勉強会が始まったが、私たちの目指すものや力量に見合った法人格がなかなか見つからなかった。二年後の九五年（同七年）には有限会社で定款づくりが始まった。しかし、利潤を全戸に配分することに疑問を感じた。合意形成に長い時間をかけている時にNPOの研修会に参加し、「利潤ではなく地域サービスを供給する仕組みが、くんまの新しい活動として位置付けられ、それが地域の利益につながる」ことを学んだ。

コミュニティビジネスで
稼いだ資金を地域に還元

「昔のように、にぎやかで元気な地域にしたい」これが活動の原点であったはずだ。県や市の支援をいただきながら、村おこしは十四年目に協議会を発展的に解消して、NPO法人として歩み出すことになった。

夢未来くんまは、豊かさと優しさで楽しさを理念とし、コミュニティビジネス（水車部）で稼いだ資金を福祉や環境保全に還元する。この仕組みによって、さまざまな地域サービスを行えるようになった。

しあわせ部は月一回（八カ所）、出前のいきがいデイサービス「どっこいしょ」と「給食サービス」を始

めた。いきがい部は「ほたるを観る会」や「大寒謝祭」を実施している。また、ふるさと部では「子どもの水辺」と「ふるさとの山・川まもり隊」事業の委託を受け、地域内外の親子を対象に、体験型の環境学習を提供してきた。その結果、熊からきれいな水を送りたいとの意識が芽生え、アクリルタワシの全戸配布や生ごみ処理と堆肥化、創造の森づくりなど環境保全活動を続けている。

NPO法人設立から七年が過ぎた。暗中模索の日々の中でも少しずつ何かが変わろうとしている。全戸加入を原則としての活動は大変であり、現状はますます深刻であるが、この活性化事業に取り組んでいなければ、そしてNPO法人を選択していなければ、今のくんまはどうなっていたのだろうか。

二〇〇五年（平成十七年）、旧天竜市は浜松市を中心とした大型合併に加わった。新浜松市は〇七年（同十九年）四月に政令市に移行した。合併以前に地域から農協は撤退し、熊中学校は廃校になった。

過疎・高齢化は一層加速が予測され、その深刻さは増すばかりである。こんな時だからこそ地域が一つになって、心豊かにいきいきと暮らすために私たちは「何を成し得るのか」「何を成さねばならないのか」を明確にし、さらに新たな研究と挑戦を続けていきたいと思う。

浜田 益嗣 氏「三重県伊勢市」

(株)赤福代表取締役会長



二百年の全財産を

まちづくり注ぎ込む

思いやりと

人情味あふれた町「伊勢」

時代が進み、世の中を見ると、頭を使った商品であったり、会社の仕組みシステムにも知恵で作り上げたものがはらんしている。悪い事ではないが、それだけ世の中が合理的に傾き、金属的でゆとりの少ない社会になってきた感がある。知恵で利益を追い求める社会の究極は、やはり落ち着きのない、温かな人情味が少ない社会ではなからうかと考える。

伊勢神宮二千年の歴史は、聖なる五十鈴川の流れの下、「施行」という思いやり、人情味にあふれた町を育んできた。その土地にまつわる風土は、お伊勢さんという呼び名で呼ばれ、私どもはこの「さん」は



伊勢を感じる商品。

お母さんの「さん」であると思い、今日に至っている。

頭で利益を求める殺伐とした社会から、どうしたら昔の祖先が営んできたあの伊勢に戻ることができるのか、そして、その行為が従事をする者をして、満足のできる経済的恩恵に浴することができ、考え続けてきた。結局、自分がそこにいたら楽しくなる町、自分がして欲しい町を実現すればよいのではないか。時あたかも人口の高齢化が進み、明日というよりは、現在が本物で健全な姿を持ち、良き日

本の思い出にも似て、温かな会話と雰囲気がある、そんな町の実現を目指した。

しかし、心ならずも地域住民との

会合の積み重ねの上に、この町が誕生した訳ではない。自分が求める町、あるいは空間は、必ずやたくさんの共感者を得るであろうことを念頭に置きながら、三百年続いたぼたもち屋の全財産を歴史ある「おかげ横丁」の建設に注ぎ込んできた。四十数軒の店舗・街並みをつくることは大変であったが、伊勢を感じていただく商品を吟味し、つくり上げるのも大変だった。それ以上に、その店々を運営する人々に、温かい笑顔と会話を求めるのが大変だった。

年間四百万人近くがこの町を訪れてくれるようになり、私どもの気持ちを受け入れていただいたことに本当に感謝している。

「おかげ横丁」をつくり、十五年の歳月が経った。そしてまた、伊勢市は第六十二回の御遷宮の時を迎える。来訪者には今までと同じように伊勢を味わってもらい、地元の人々の気持ちを感じてもらい、祭りや市を通して伊勢の風土を感じてもらい、できれば大切な日本の心を感じていただく町にしたい、と最近思うようになった。

「暮らしが楽しくなる」町を目指す

これからの横丁の進み方だが、「季節を知ったら暮らしが楽しくなった」という思想の下、「日本の暮らしのぞき箱」というホームページ

を開設し、かつて食べ物、着る物や部屋の装飾に気を配って、暮らしをより楽しいものにしたと努力してきた日本の主婦のよき伝統を、日本人の健全な暮らしの過ごし方の一典型として、それとなしに、しかし、はつきりと意識をして、この町の性格にしていってらうだろう、という考えである。

地球の中にたくさんの国が存在するが、わが国ほど春夏秋冬、しかもその季節の進み具合を正確に描写できるほど、規則正しい変化をもっている国はない。しかし、われわれは、冷暖房あるいは冷蔵庫、電子レンジなど、暮らしの中で温度を変化させることで、いつかこの季節を愛でる、あるいは季節を感じることを忘れてしまった。それだけ暮らしが形式的で、薄っぺらい味わいのないものになった。

わずか百年前に、われわれの先祖が営んできた日本の暮らしは、旧暦の世界であった。何気なく記憶の彼方に遠ざかっていった思い出の数々は、しっかりと暮らしの知恵とセンスの塊であった。

おかげ横丁は、芸術を論じようという高まいた気持ちはさらさら持ち合わせていない。日本に生まれたこの偶然を誇りあるものとし、精一杯そのことから楽しみを見つけていきたい、そんな気がしている。一層のご声援をお願い申し上げる次第である。

鹿児島県に広く分布する火山灰。豪雨の際は山崩れなどの被害をもたらす厄介な地域資源である。この「厄介者」を「何とか地域産品づくり」に利用できないか」として、同県内で二つの地域企業が火山灰を使用し、地域性ある化粧品づくりと陶器づくりに挑戦している。火山灰の持つ鉱物成分を利用することにより、利用者から「毛穴の汚れまでが取れる」「気になる体臭もなくなる」などと、品質面に特性ある商品が登場しており、鹿児島を代表する新しい地域商品として、関係者の注目を集めている。

「シラス」を使用した化粧品づくり

シラスで美肌を、自然素材が洗顔クリームに

化粧品製造・販売の天元（本社・始良町、資本金千三百万円、又野佳洋子社長）は一九八八年（昭和六十二年）、シラスを使用した「荷電微粒子洗浄剤」の特許を取得した。シラスに技術加工すると、

シラスの利用は、同社創業者の又野一己会長（八〇）が旧日本海軍の少年兵時代、「西南戦争の西郷軍がシラスを刀の磨き粉に使った」「軍艦の真ちゅう製マストがシラスで磨

くとピカピカになった」などの話、体験をヒントに八七年（昭和六十二年）、食器などの磨き粉を商品化したのが始まりだ。利用者からの「なべを磨いたら手がきれいになった」などの反応を踏まえ、化粧品製造に乗り出した。シラスの特性を県や大学との共同研究を重ねて発見し、「厄介者としてのデメリットをメリットに転換させる製法」を考案したため、この夏にはタイプの違う洗顔料も発売する予定だ。

同社によると、原料となる特殊シラスは、陸海の隆起変動によってア



又野佳洋子社長

だが、近年は愛好者が増えて売上高が急増、昨年は八億円を超えた。一部は通信販売業者も販売しているほか、米国や中国など海外からの引き合いも始めている。

今後は、大量退職する団塊の世代などを狙い、加齢臭対策などを打ち出した男性用ボディソープ、それにシャンプーや歯磨き粉などの商品開発に取り組んでいく方針だ。美容師とエステシヤンの資格を持つ又野佳洋子社長は、「地域資源を利用した本

に役立つ商品を作り、地域の振興に役立てば」と語る。「どうしたら全国に商品の良さをアピールし、販売を拡大できるか」が、最大の経営課題だという。

(右) 洗顔クリーム
(下) 洗顔せっけん



洗顔せっけんの泡立ちの様子

製造することで、シラスの微粒子が肌の毛穴の汚れを吸収し、また、遠赤外線が体に浸透（波動）して、マッサージ・温熱作用や血行促進の働きが期待できるという。

現在の主力商品である洗顔料は、以前よりシラス粒子をさらに微細・マイルドに仕上げていたため、化粧品としての地位を確立。シラスの加工・製造に一生懸命で、「販売までは考えが及ばなかった」ことから、今も地元百貨店での商品販売が主力

本社・工場



鹿児島県の代表的な伝統工芸品に「薩摩焼」があるが、その中には桜岳から噴出する火山灰と温泉水を使用した「桜島焼」の窯元「桜岳陶芸」(鹿児島市桜島町、千五百万円)がある。鉄分が多い鉱物含有資源を利用し、高温で焼き上げる焼き物のため、ほかにはない「深みと深みのある色」が特徴だ。窯元は桜岳の麓に位置し、観光客や地元住民との出会い・触れ合いの場にもなっている女性だけのコミュニティビジネスである。

火山灰と温泉水を使用した焼き物づくり

桜島の地域資源が生んだ陶器、窯元が地域の交流の場に

桜島焼の歴史はまだ三十年と新しい。創業者の故石原洋氏は当初、薩摩焼で始めた窯元だったが、桜島の活動が活発化した昭和六十年前後、一日中降り積もる桜島岳の火山灰を利用できないかとして、敷地に積もる火山灰を材料の粘土に5%ほど加えたのが始まりだ。また、火山活動により水道水が出なくなり、毎日降る火山灰を掃除するために地下水のボーリングを行ったところ、温泉水が噴出。この温泉水をうわぐすりに使った結果、鉄分が加わって、「単純な色ではない焼き物ができ上がった」。

陶器は通常、千百度で焼き上げるが、同窯元は千二百四十度の高温で



社屋



右端が橋野翠史さん、左から2人目が橋野美穂香さん、その上が横道ひろみさん

焼き上げるのが特徴だ。その結果、「なかなか出ない光沢のある銀色に焼き上がる」「深みと深みのある色(黒や青)が出る」など、薩摩焼と

は違う焼き物ができあがった。現在は、故石原氏の志を受け継いで橋野翠史さん、横道ひろみさんの姉妹が窯元を支えている。

かつて桜島は、宮崎―鹿児島間の代表的な周遊観光コースだったが、火山活動の活発化後は観光客が少なくなり、同窯元も地域活性化に向けて特色ある経営と焼き物づくりを迫られていた。両姉妹は、「買ってもらえるものを作る」「桜島にちなんだ焼き物にしたい」などの考えから、アクセサリーやマグカップなどの商品を増やした。中でも地元サツマイモの形をした酒器が焼酎ブームに後押しされて、売れ



(左) 酒器「芋千代香」

(下) 香炉



筋商品になっている。

年間売上高は、店頭での販売が主の約五千万円だが、体験観光で始めた陶芸教室が好評で、遠く本州から来る観光客などのファンが増え、売上高の1割を占めるようになった。地域の女性を加えた六人だけで経営・運営する窯元は、訪れる誰にでも茶を出して会話をする「地域の集会所」だ。

「ここが(地域の)コミュニティセンターの場になってほしい」「癒しを提供できたらいい」などと、心温まる接客・対応に務めるのが「経営方針」である。橋野翠史さんの長女である美穂香さん(二七)が窯元の後継者に決まり、今後は行政と協力して観光客の誘致拡大に取り組んでいくのが課題だ。将来は「地域の魅力を高めて、桜島を日本のハワイにしたい」と、両姉妹はその目標を熱く訴える。



67の企業・自治体・有識者が結集！

『移住・交流推進準備委員会』が設立へ

都市から地方への移住や地域間交流の促進を目的とした「第一回移住・交流推進準備委員会」が三月二十八日、総務省会議室にて開催された。当日は意欲ある三十二の企業（および各種団体）および三十三の自治体、また二人の有識者からなる委員が、さらにオブザーバーとして総務省が出席した。

会議はまず、準備委員会設置要綱（案）の承認から始まり、委員長の選任へと移った。委員長には、有識者として出席の島田晴雄氏（千葉商科大学学長）が推薦を受け、満場一致で承認を得た。

島田委員長は就任に当たり、「人口減少時代を迎えての地方経済活性化策として、人々の意思としての動き（移動）を活性化させることが重要。この動きを国民運動にまで高めるためには、行政の力だけではなく、民間企業が参加し、ビジネス観点を取

り入れることが不可欠。このような規模および密度で企業と行政が議論し、運動を進めるのは日本初の試みであり、互いの強みを生かしながら連携・協働し、素晴らしい日本を構築したい」と決意を述べた。

その後、島田委員長の議事進行の



就任あいさつする島田晴雄委員長

下、幹事の選任、活動計画の承認、JTBによる取り組み事例紹介、事務局から推進組織概要などの説明が続き、約二時間で幕を閉じた。閉会後には島田委員長の呼び掛けもあり、会場の至る所で名刺交換が始まった。設立初日から官・民の活発な交流の萌芽を見ることができた。

さて、今後の活動計画については、準備委員会および幹事会それぞれ二回の実施を経て、九月上旬には移住・交流推進のための全国的な組織の設立総会を開催すべく、鋭意準備を進めている。全国的な推進組織では、生活関連の商品やサービスを提供する幅広い業種の民間企業に参画いただき、地方自治体と共同で消費者満足に取り組むことを目指している。

中でも、①ホームページやイベント・フェアなどを通じての「情報発信事業」②地域の受地体制整備を目

的とした「移住・交流ビジネス創出支援事業」③企業・自治体各会員の出会いと協働の機会創出を目的とした「調査研究・交流事業」——と三つの事業の大きな柱を建て、それぞれの実施計画について議論を深めている。

今回の第一回準備委員会では、初回の会合であったにもかかわらず、極めて具体的に積極的なご意見をいただくことができた。事務局としては、このような皆様の熱意を大事にしていきたいと考えている。現在、準備委員会や幹事会の場とは別に、委員の方々を個別に訪問して、組織に関するご意見やご質問をちょうだいしている。また、新たな委員候補について、ご推薦やご紹介を日々いただいております、さらなる会員拡大に向けて取り組みを続けている。

皆様のご協力に心より感謝しつつ、より良い組織組成のために、今後引き続きのお力添えをお願いしたい。準備委員会事務局メンバー全員、皆様の期待に対する大きな責任感と同時に、組織の将来にワクワクしながら業務に励んでいる。

移住・交流推進準備委員会事務局

● 原田 亮

全国地域リーダー養成塾 開講式

第19期生40人が入塾

(財)地域活性化センターが一九八九年(平成元年)度から実施している全国地域リーダー養成塾の第十九期の開講式が五月九日、大森彌塾長(東京大学名誉教授)をはじめとする講師陣、総務省の生嶋文昭自治政策課長ら関係団体、塾生派遣元団体関係者が出席する中、地方公共団体、地域づくり団体などから四十人の塾生を迎えて、東京・中央区の銀座ラフィナートで行われた。

同養成塾は、「広い視野と深い見識、卓越した想像力と豊かな人間性を備え、常に問題意識と確固たる使命感を持ち、積極的・主体的に行動のできる地域のリーダーを養成する」ことを基本理念に開講し、これまでに五百七十六人が卒業、地域のリーダーとして全国各地で活躍している。

開講式では、大森塾長から「当塾を通じて、自分自身の人生で培ってきた知識、知恵、考え方について思

い巡らし、違う自分があり得ることに気付いてほしい」と塾生を激励した。これに対し、塾生を代表して竹ヶ原公さん(NPOプロ・ワークス十和田)が「今年一年の塾活動を機に、改めて地域を見詰め直し、理論と実践を磨き上げること、地域づくりの実践者として大きく飛躍した



開講式集合写真

い」と決意を表明し、開講式を終了した。

同養成塾の主な特徴は、①地域づくりに必要なテーマについて複数の講師の講義を中心に体系的に行っている②通常の講義のほかにも、専門家、行政・民間の実践家などの多彩な講師陣によるワークショップ、イベントなど実践面を重視した演習を多く取り入れている③五人の主任講師による少人数のゼミナール形式の講座を開講し、塾生の課題研究に對して、きめの細かい指導を行って④卒業後も、定期的に修了者を対象とした研修会、情報交換会を開催するなどフォローアップを行って



塾生の決意表明

塾長・主任講師一覧

【塾長】

大森 彌 (東京大学名誉教授)

【主任講師】

山下 茂 (明治大学大学院教授)

後藤 春彦 (早稲田大学教授)

小田切 徳美 (明治大学教授)

内海 麻利 (駒澤大学准教授)

大 杉 覚 (首都大学東京教授)

研修は東京で五、六、八、十、十二、二月に各三、四日間行なう一般研修のほか、七月には寝食を共にし、交流を深めることを目的とした合宿研修、各ゼミ単位で課題研究やまちづくり団体とのネットワーク拡大を目的とした先駆的地域づくり現地調査も行っている。

特定非営利活動法人を主体とするまちづくりの進展や地元企業・団体との連携による地域活性化など、住民自治に関連するさまざまな新しい取り組みが次第に大きな流れとなっているおり、塾生は地域の枠組み自体が大きく変わろうとしている中で、これから十ヵ月に及ぶ研修に参加する。

(財)地域活性化センター 研修交流課

● 宮本 明人

地域再生実践塾の開催決定

参加者大募集！

地域再生の方法についてさまざまな視点から考えるワークショップ「地域再生実践塾」を、全国5カ所で開催します。

開催内容

第1回 新しい住民自治の実践と展望

開催地：東京都三鷹市

主任講師：伊藤雅春氏（（有）大久手計画工房代表）

開催日：8月20日（月）～22日（水）

申込締切：8月1日（水）

第2回 モノづくりにみる地域活性化

開催地：大阪府東大阪市

主任講師：大西正曹氏（関西大学教授）

開催日：8月29日（水）～31日（金）

申込締切：8月8日（水）

第3回 映像文化によるまちづくり

開催地：山口県下関市

主任講師：前澤哲爾氏（全国フィルム・コミッション連絡協議会専務理事）

開催日：9月4日（火）～6日（木）

申込締切：8月15日（水）

第4回 世界に向けた観光戦略

開催地：長崎県長崎市

主任講師：溝尾良隆氏（城西国際大学教授）

開催日：9月10日（月）～12日（水）

申込締切：8月22日（水）

第5回 ブランドイメージと地域の活性化

開催地：群馬県草津町・高崎市

主任講師：大宮登氏（高崎経済大学教授）

開催日：11月13日（火）～15日（木）

申込締切：10月24日（水）



平成18年度に福井県小浜市で開催した実践塾の様子

◆対象：地方公共団体、商工会、商工会議所、NPOなど、地域再生に取り組んでいる人

◆募集人数：各回40～50人

◆参加費用：無料（開催地までの往復の交通費、宿泊費、飲食代などは参加者負担）

◆申込方法：申込書を当センターまで送付してください。
申込書の様式は当センターのホームページからもダウンロードできます。

*詳しくは、当センターのホームページをご覧ください。

業務第2課 TEL 03-5202-6137

ヨーロッパ地域づくり 海外調査団のご案内

海外の先進事例から、より良い「まちづくり」を学びませんか？

（財）地域活性化センターは毎年、先進的な地域づくりを調査・研究するための海外調査団を派遣しており、参加者から好評をいただいております。

平成19年度は、次のコースを企画しましたので、ぜひご参加ください。

○ 調査テーマ及び調査地

● 住民参加による環境に配慮したまちづくり

アムステルフェーン市（オランダ）

行政と住民・民間との協働による環境政策やまちづくりの取り組みについて調査します。

● 地域資源を活かしたまちづくり

北部アイフェル地区自然公園協会（ドイツ）

地域ブランド育成による「自然保護とツーリズム」をキーワードとした、地域資源を活かしたまちづくりについて調査します。



アイフェル地区自然公園

● 民間活力導入・官民協働によるまちづくり

バルセロナ旧市街振興公社（スペイン）

官民パートナーシップの究極モデルとして構築した22@bcnプロジェクトなど、官民協働による都市の再生について調査します。

● 少子高齢社会におけるまちづくり

デビー市（スウェーデン）

スウェーデン特有の保育施設である公開児童センターなど、包括的な子育て支援と育児環境整備の実践について調査します。

◆日程：平成19年10月8日（月）～19（金）

◆費用：618,000円

◆募集人員：20人程度

◆お申込み

平成19年7月31日（火）までに、企画調査課へ。

TEL 03-5202-6133

FAX 03-5202-0775

E-mail kikakucyousa@jcrd.jp

スポーツ拠点づくり推進事業

6月の承認スポーツ大会開催のお知らせ

お近くの方はぜひ会場へ！ 小中高校生の熱戦をご観戦ください。

開催日	大会名	大会会場
6/16 ～17	全日本キャデット・アーチェリー選手権大会	備前市日生運動公園スポーツ広場（岡山県 備前市）



はまなす杯全国中学生空手道選抜大会
（3月開催・北海道北広島市）



全国高等学校男子ソフトボール選抜大会
（3月開催・静岡県富士宮市）

*大会に関する詳しい内容、その他スポーツ拠点づくり推進事業に関するお問い合わせ先
情報サービス課 TEL 03-5202-6135 FAX 03-5202-0755

水路をくぐり抜け巡りあう神秘。
ここは東洋のベネチア。



【嫁入り船】
いばらき



あやめ



前川あやめ園

古くから多くの文人・墨客が訪れた情緒漂う水郷の面影。花嫁さんがきっぱ角で嫁入りする花嫁舟の習わしは、今でも観光向けに寂情的な世界を作り出しています。6月には前川あやめ園などを会場に「水郷産物あやめまつり」が行われ、白や紫に染く花笠屋が街を華やかに彩ります。



茨城県・漫遊いばらき観光キャンペーン推進協議会 TEL.029・301・3622 茨城県の観光ホームページ <http://kanko.pref.ibaraki.jp/>

茨城県

都道府県漫遊
POSTER GALLERY

手前みそ
ですが…

青森県

むつ市

101



田名部まつり

鯛島



り、むつ湾にダイブするかの
ような、豪快なスキー&スノ
ーボードが楽しめる。

冬は金臥山での
スキー。下北半島
の最高峰（八百七
十九メートル）に
は、スキー場があ
る。

秋は紅葉と温泉、
川内川渓谷の「ふ
れあい温泉川内」、
大畑川上流部の
「薬研温泉郷」で情
緒満点だ。

ライマックスにな
る。

北限の猿が住み、ヒバの緑
美しい山中には、日本三大霊
場の恐山や湯量豊富な温泉、
四季折々の美しさを川面に映
す溪流などが点在。食通を魅
了する海の幸、山の幸の宝庫
でもある。

つ市は、青森県の北部
に位置する本州最北の
市である。人口六万五
千七百人、世帯数二万八千二
百五十世帯、面積は八百六十
四平方キロ。下北地域の中心
都市として各種機能が集積
し、市民や広域住民の生活拠
点としての役割を担ってい
る。

む

地区の桜の名称「愛宕山公園」
ではカモシカも姿を見せる。
夏は海や山でのアウトド
ア。脇野沢の海釣り公園に、
鯛島を経て仏ヶ浦を結ぶ観光
遊覧船、かわうち湖レイクサ
イドパーク、オートキャンプ
場も備えた早掛レイクサイド
ヒル・キャンプ場などジャン
ルも多彩だ。また、京都・祇
園の流れをくむと言われる各
地の夏祭りも見応えがあり、
中でも下北地域最大の夏祭り
「田名部まつり」は、毎年八
月十八日から二十日に行わ
れ、おはやしとともに豪華け
んならな山車が市内を練り歩
き、最終日の深夜、五台の山
車が別れる「五車別れ」がク
ライマックスにな

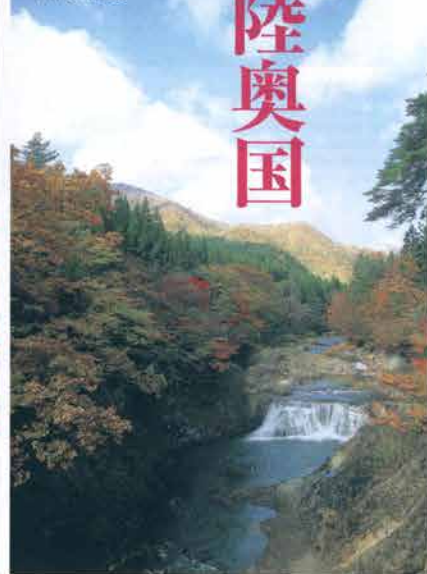
恐山



人と自然が輝く
やすらぎと活力の大地

陸奥国

川内川渓谷



大湊ねぶた

6月

★日本橋プラザビルイベントスペース

- 6月1日
一関市（岩手県）
- 6月7日～8日
常陸太田市（茨城県）
- 6月21日～22日
南房総市（千葉県）
- 6月26日～27日
南陽市（山形県）
- 6月28日
東根市（山形県）

★ふるさと情報プラザ

- 6月4日～8日
滋賀県
～近江上布～夏の装い
- 6月11日～15日
北海道移住促進協議会
夏の北海道ちょっと暮らし～一歩
すすんだ魅力探しの旅へ～
- 6月18日～22日
六合村（群馬県）
～窓を開けると緑の香り～「野反
湖と六合村温泉郷の旅」
- 6月25日～29日
飯能市（埼玉県）、飯能商工会議所
気軽に行ける自然体験の宝庫（飯
能市）～武蔵野の奥座敷～

※「地域づくり5月号」における6月予定イベント
の表記に一部誤りがありました。

【誤】6月26日～28日 山形県東根市
正しくは上記の通りです。訂正してお詫び申し
上げます。



7月

(*は仮題)

★日本橋プラザビルイベントスペース

- 7月5日～6日
兵庫県
- 7月12日～13日
松本市（長野県）
- 7月26日～27日
中国五県物産・観光協議会

★ふるさと情報プラザ

- 7月2日～6日
高島市（滋賀県）
夏の高島市観光物産展*
- 7月9日～11日
京都府
日本の伝統的な装い*
- 7月12日～13日
上越市（新潟県）
上越はすまつり展*
- 7月17日～20日
関市（岐阜県）
関の小瀬鶏飼と観光物産展*
- 7月23日～27日
今治市（愛媛県）
いまばりタオル展*
- 7月31日～8月2日
木曽観光連盟
夏の木曽観光物産展*

(写真)

- 1 妙高市フェア（妙高の観光と物産展）（4/16～17）
2 福井県の物産「精進アイスと焼き鯖寿司」(4/23～24)
＜以上日本橋プラザビルイベントスペース＞
3 「信州・風林火山」諏訪由布姫まつりキャンペーン
（4/9～13）
4 暫定リスト掲載国内決定!! 「目指せ!! 世界遺産 富岡
製糸場!!」(4/25～27) ＜以上ふるさと情報プラザ＞

【編集後記】

▼今月号は、三月十四日に行われた地域づくり
総務大臣表彰（平成十八年度）を特集のテーマ
に取り上げた。各都道府県の推薦の中から四部
門三十一団体・個人の取り組みが高く評価さ
れ、表彰された。日ごろの地道な努力と活動が
実を結んだもので、まずは敬意を表したい。

▼前回（前年度）と同様に、今回も地域の豊か
な自然や歴史、文化などの資源を保全・活用し
ながら、自慢のできるような美しいまちづくり、
高齢化社会の急速な進展に対応した地域福祉の
充実したまちづくり、国際化に伴う世界との交
流や急増する外国人との共生のまちづくり、ご
み資源のリサイクルや新しいイベントによる地
域の活性化、さらには体験型観光導入による地
域経済の振興、ICT技術を利用した地域コミ
ュニティの形成や地域情報格差の解消などの取
り組みが目立った。

▼また、今回から新たに「個人部門」が創設さ
れ、全国各地で活躍する地域づくりスペシャリ
スト四人が表彰された。中でも、伝統ある地域
のにぎわい回復のため、私財五億円をまちづく
りに寄付したケースもあり、地域に対する愛着
心の強さと地域振興に向けた情熱を強く感じさ
せた。各団体・個人ともに、大臣からの表彰に
よって、これまでの長年の努力・苦勞が報われ
たものと思われる。

▼安倍内閣の地域経済振興の目玉として、地域
資源を利用した中核企業を今後五年間に全国で
一千育成する方針が打ち出された。今月号は、
鹿児島県で「厄介者」にされている火山灰を
活用した化粧品づくり、陶器づくりの企業を紹
介した。地域を代表する中核企業への発展を期
待したい。

(沢)

7月号予告

特集II 省エネ推進・温暖化防止のために

地域づくり6月号

2007年6月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131 (代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

いつもポケットに夢を。



いつでも・いろいろ・発売中。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ



財団法人 日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>